

京都市内遺跡試掘調査報告

令和6年度

2025年3月

京 都 市 文 化 市 民 局

京都市内遺跡試掘調査報告

令和6年度

2025年3月

京 都 市 文 化 市 民 局



1 2区東半部 全景（南西から）



2 2区灰原断面（南から）



1 3区全景（南東から）



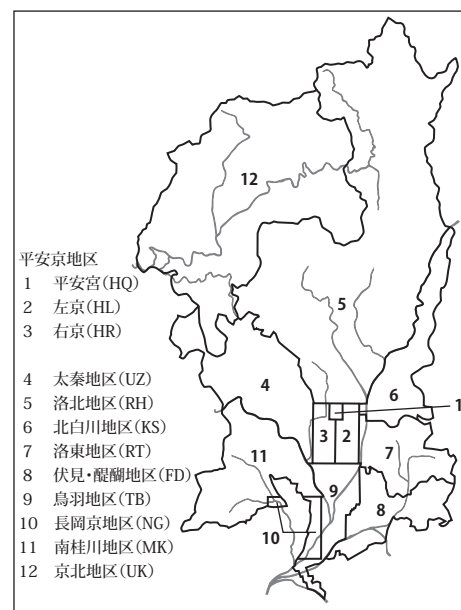
2 5区全景（北から）

例 言

- 1 本書は、京都市が文化庁の国庫補助を得て実施した令和6年度の京都市内遺跡試掘調査報告書である。令和6年1月から令和6年12月まで実施した試掘調査のうち、重要な成果のあったものについて本文で報告している。ただし、試掘調査の結果、発掘調査を指導したものについては、発掘調査報告書の刊行を待つこととし、原則一覧表にのみ掲載している。
試掘調査を実施したすべての地区・所在地・調査日・調査概要については、試掘調査一覧表に掲載している（47～56頁）。なお、各章表題末尾の番号と調査一覧表の番号並びに図版の番号は対応している。調査一覧表では各時代の「時代」は省略した。遺跡名は、平安宮跡、平安京跡、長岡京跡については、官衙・条坊を優先して記載した。
- 2 本文の執筆分担は、本文の末尾に記している。
- 3 本書報告の調査のうち、基準点測量を実施した調査の方位及び座標は、世界測地系平面直角座標系VIによる。標高はT.P.（東京湾平均海面高度）による。また、これ以外の場合は、既存公共物などを仮基準点（KBM）として用いている。
- 4 本書に使用した地図は、本市の都市計画局発行の都市計画基本図（縮尺 1/2,500）を複製して調整したものを掲載している。なお図版に使用した地図の縮尺は以下のとおりである。
図版 1～13 1/8,000 図版 14～20 1/10,000
- 5 本書で使用した遺物の名称及び形式・型式は、一部を除き、平尾政幸「土師器再考」『洛史』研究紀要第12号（公財）京都市埋蔵文化財研究所2019年に準拠する。

750	840	930	1020	1110	1170	1260	1350	1410	1500	1590	1680	1740	1800	1860
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	
A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C

- 6 本書に使用した土壌色名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帳』に準じた。
- 7 調査及び整理にあたっては、飯沼俊哉・上茶谷美保・上別府亜紀・早川仁志・林友紀・松本和子・吉本健吾の協力を得た。
- 8 調査及び本書作成は、京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課が担当し、（公財）京都市埋蔵文化財研究所の協力を得た。



調査地区割図

本文目次

I	試掘調査の概要	1
II	平安京右京	
1	五条四坊二町跡、西京極遺跡（右京区西院日照町 52-1、53-2）	3
2	六条三坊六町跡（右京区西院西溝崎町 22-1、22-4、22-5）	7
III	その他 市内遺跡	
1	嵯峨遺跡（右京区嵯峨天龍寺瀬戸川町 3-2）	10
2	嵯峨野高田町遺跡（右京区嵯峨南浦町他）	14
3	植物園北遺跡（北区上賀茂南大路町 85 他）	18
4	木野墓窯跡（左京区岩倉幡枝町 1067-4 他 地内）	22
5	鳥羽離宮跡、鳥羽遺跡（伏見区竹田真幡木町 176、177、178）	30
6	史跡・特別名勝 西芳寺庭園（西京区松尾神ヶ谷町 56）	35
7	下津林遺跡（西京区下津林佃 65、66、67）	39
IV	試掘調査一覧表	47

報告書抄録

挿 図 目 次

I 試掘調査の概要

図 1 年次別・地区別試掘調査実施件数	1
---------------------------	---

II - 1 平安京右京五条四坊二町跡、西京極遺跡

図 2 調査位置図	3
図 3 調査区配置図	3
図 4 1 区全景（南西から）.....	4
図 5 2 区全景（南西から）.....	4
図 6 3 区全景（南東から）.....	4
図 7 調査区平面断面図	5

II - 2 平安京右京六条三坊六町跡

図 8 調査位置図	7
図 9 1 区北壁断面図	8
図 10 調査区配置図及び調査 3 遺構位置図	8
図 11 1 区全景（南西から）.....	9
図 12 1 区溝 1 断面（南から）.....	9

III - 1 嵯峨遺跡

図 13 調査位置図	10
図 14 調査区配置図	10
図 15 1 区平・断面 2・3 区断面図	11
図 16 4・5 区平・断面図	12
図 17 出土遺物実測図	13
図 18 調査地と周辺の寺院の位置関係	13

III - 2 嵯峨野高田町遺跡

図 19 調査位置図	14
図 20 調査区配置図	14
図 21 1 区平・断面図	15
図 22 詳細分布調査柱状断面図	16
図 23 遺物実測図	17

Ⅲ - 3 植物園北遺跡

図 24 調査位置図	18
図 25 調査区配置図	18
図 26 土坑 1 検出状況（南西から）	19
図 27 ピット検出状況（南から）	19
図 28 出土遺物実測図	19
図 29 1 区遺構面平面断面図	20

Ⅲ - 4 木野墓窯跡

図 30 調査位置図	22
図 31 調査区配置図及び灰原検出範囲	23
図 32 2 区灰原検出状況（部分）（南から）	23
図 33 1 区平・断面、2・3 区断面図	24
図 34 4～8 区断面図	25
図 35 ヘラ記号のある須恵器	26
図 36 土器実測図及び拓影	27
図 37 瓦類実測図及び拓影	28
図 38 窯壁片	29

Ⅲ - 5 鳥羽離宮跡、鳥羽遺跡

図 39 調査位置図	30
図 40 調査区配置図	30
図 41 1・2 区断面図	31
図 42 3 区北・東断面図	32
図 43 4 区平・断面図	33
図 44 出土遺物実測図	34

Ⅲ - 6 史跡・特別名勝 西芳寺庭園

図 45 調査位置図	35
図 46 調査区配置図	35
図 47 水路跡の凹みと黄金池（東から）	36
図 48 調査区平・断面図	36
図 49 水路跡完掘状況（西から）	37
図 50 調査区から黄金池を望む（東から）	38

Ⅲ - 7 下津林遺跡

図 51 調査位置図	39
図 52 調査区配置図	40
図 53 1区溝2検出状況（東から）	40
図 54 1区竪穴建物 101 検出状況（北東から）	40
図 55 1区遺構平・断面図	41
図 56 2・3・5区遺構位置図	42
図 57 4区南壁断面図・2区遺構平・断面図	43
図 58 出土遺物実測図	45
図 59 遺構面接合図	46

表 目 次

Ⅰ 試掘調査の概要

表 1 出土遺物概要表	2
-------------------	---

Ⅱ - 2 平安京左京六条三坊六町跡

表 2 調査一覧	9
----------------	---

Ⅲ - 4 木野墓窯跡

表 3 須恵器破片数	26
表 4 瓦類破片数	26

図 版 目 次

巻頭図版 1 Ⅲ - 4 木野墓窯跡

1 2区東半部 全景（南西から）

2 2区灰原断面（南から）

巻頭図版 2 Ⅲ - 7 下津林遺跡

1 3区全景（南東から）

2 5区全景（北から）

図版 1 平安宮

図版 2 平安京左京北辺～三条 一・二坊

図版 3 平安京左京北辺～三条 三・四坊

図版 4 平安京左京 四～六条 一・二坊

図版 5 平安京左京 四～六条 三・四坊

図版 6 平安京左京 七～九条 一・二坊

図版 7 平安京左京 七～九条 三・四坊

図版 8 平安京右京北辺～三条 三・四坊

図版 9 平安京右京北辺～三条 一・二坊

図版 10 平安京右京 四～六条 三・四坊

図版 11 平安京右京 四～六条 一・二坊

図版 12 平安京右京 七～九条 三・四坊

図版 13 平安京右京 七～九条 一・二坊

図版 14 嵯峨院跡、大覚寺古墳群、嵯峨遺跡、史跡・名勝嵐山

図版 15 龍安寺御陵ノ下町遺跡、円乗寺跡、仁和寺院家跡、草木町遺跡、常盤東ノ町古墳群
太秦馬塚町遺跡、常盤仲之町遺跡、村ノ内町遺跡、和泉式部町遺跡、広隆寺旧境内
御所ノ内遺跡、多藪町遺跡、西野町遺跡、嵯峨野高田町遺跡

図版 16 本山遺跡、岩倉忠在地遺跡、木野墓窯跡、御土居跡、植物園北遺跡

図版 17 上京遺跡、上御霊遺跡、相国寺旧境内、室町殿跡（花の御所）、一乗寺跡、北白川廃寺、
公家町遺跡、寺町旧域、白河南殿跡、法性寺跡、建仁寺旧境内

図版 18 伏見城跡、鳥羽離宮跡、鳥羽遺跡、史跡鳥羽殿跡

図版 19 長岡京跡、水垂遺跡

図版 20 中臣遺跡、六波羅政庁跡、長岡京跡、史跡・特別名勝西芳寺庭園、福西古墳群、下津
林遺跡、上久世遺跡

I 試掘調査の概要

1. 京都市内の埋蔵文化財行政と試掘調査

京都市で所管する周知の埋蔵文化財包蔵地の件数は、令和7年1月現在で843件を数える（去年の概要に記された件数は間違いであった）。その種類は、平安京跡、長岡京跡に代表される都城跡をはじめ、宮殿跡、離宮跡、邸宅跡、寺院跡、城跡、集落跡、古墳、窯跡、散布地と多岐にわたる。またその存続期間は旧石器時代から近現代までと幅広く、遺構面は重層的に存在する。このため集落と都城跡、古墳群と城跡など、異なる性格を備えた遺構が並列・重複して検出されることも珍しくなく、これらが遺跡の理解をより難しいものとしている。

京都市では、埋蔵文化財包蔵地を保護する上で注意を要する程度に応じて「重要遺跡・小規模遺跡」「特別一般遺跡」「一般遺跡」「一般遺跡に準ずる遺跡」の4種に分類し、要項によりそれぞれの扱いを定めている（『周知の埋蔵文化財包蔵地内における取扱い要綱（京都市域内）』令和5年1月4日改訂）¹⁾。包蔵地内で土木工事や開発行為が計画された場合、京都市文化財保護課（以下、当課という）は遺跡の特性と工事規模に応じて「発掘調査」「試掘調査」「詳細分布調査（立会調査）」「慎重工事」の4種の行政指導を行う。このうち試掘調査は、遺跡の有無や遺構の残存状況、その範囲等を把握し、更なる措置が必要であるかを判断する作業である。令和6年度現在、当課では計14名の文化財保護技師が行政指導に従事している。

試掘調査の結果、遺跡の残存状態が良好であり、かつ工事による遺構の損傷を免れないと判断された場合は、設計変更による遺跡の保護もしくは対象範囲の発掘調査が指導される。令和6年は昨年に比べて届出総数は増加し、これに即して試掘調査件数も増加した。

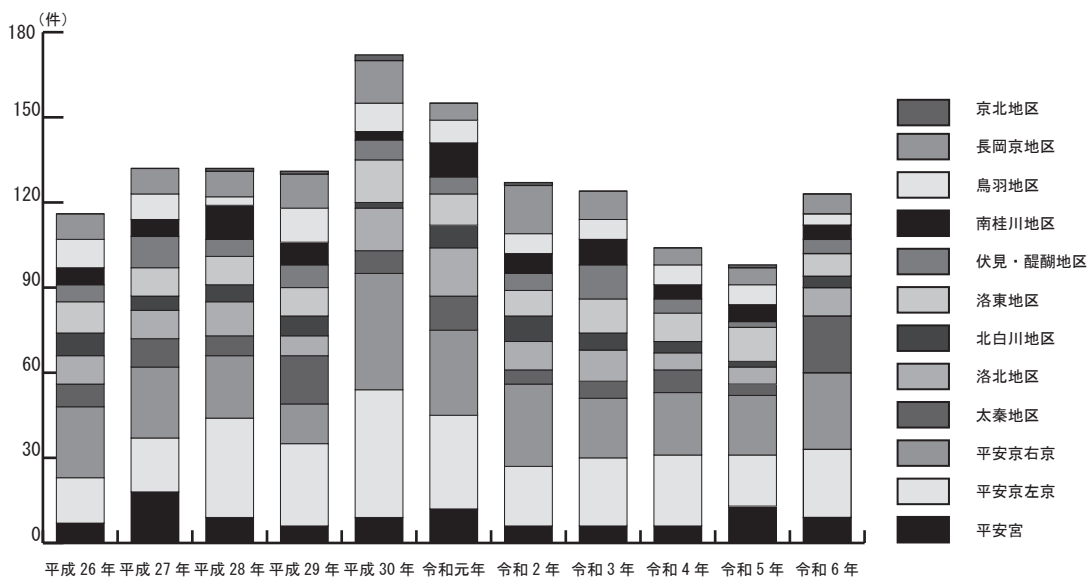


図1 年次別・地区別試掘調査実施件数

2. 令和6年の試掘調査概要

令和6年1月～12月に文化財保護法第93条に基づいて提出された届出と、同第94条に基づく通知の件数は、あわせて1,238件をかぞえる。この件数は、前年より89件の減少となる。一昨年が237件、昨年が139件の減少であるから、この3年間で465件も減少した。インバウンド需要取り込みに伴う事業拡大が、コロナ禍を経た令和3年に収束を始めたと考えられる。その中で届出・通知に対する保護課の指導内容は、発掘調査11件（前年15件、4件減）、試掘調査118件（前年122件、4件減）、詳細分布調査529件（前年499件、30件増）、慎重工事580件（前年691件、111件減）である。

この報告の対象となる試掘調査実施件数は、令和5年が98件であったのに対し令和6年は124件と増加した。開発面積の大きい案件も多く、実働日数も令和5年の139日間にに対し令和6年は171日間に増加した。地区ごとの内訳では、平安宮域9件（前年13件）、平安京左京域24件（同18件）、平安京右京域28件（同21件）、太秦地区20件（同4件）、洛北地区10件（同6件）、北白川地区4件（同2件）、洛東地区8件（同12件）、伏見・醍醐地区5件（同2件）、鳥羽地区4件（同7件）、長岡京地区7件（同6件）、南桂川地区5件（同6件）、京北地区0件（同1件）である。地区別にみると、宮・左京・右京域で増減がみられるが平安京域としては1件の減少に留まっている。太秦地区が前年の4件から本年は20件と激増している。詳細分布調査においても太秦地区は35件増加している。同地区は一大観光地である嵐山エリアを含み、かつては映画撮影所も多くあり、時代劇ロケ地の名所であった。観光開発が周縁地域にも及んできた可能性が考えられる。

試掘調査を実施した124件のうち33件に対して発掘調査の実施を指示した（「Ⅳ 試掘調査一覧表」47～56頁参照。No.も一覧に対応）。発掘調査を実施したのは、保護課1件（No.26）、（公財）京都市埋蔵文化財研究所5件（No.11・33・46・58・79）、古代文化調査会2件（No.44・87）、（株）文化財サービス3件（No.24・25・29）、（株）アルケス2件（No.6・21）、（有）京都平安文化財1件（No.4）、（株）島田組3件（No.10・27・124）、NPO法人平安京調査会2件（No.16・64）、国際文化財（株）1件（No.42）、安西工業（株）1件（No.100）の計21件で、2件（No.81・89）が現在協議中である。以上のほかに、設計変更等により遺跡の地中保存が図られたことから、発掘調査に至らなかった例が4件（No.29・43・70・93）ある。

（熊井 亮介・上茶谷 美保）

表1 出土遺物概要表

	Aランク点数 (箱数)	内訳	Bランク点数 (箱数)	Cランク点数 (箱数)	出土箱数 合計
点数 及び 箱数	85点（4箱）	弥生土器7点、土師器21点、須恵器37点、 瓦器7点、灰釉陶器1点、白磁1点、青磁2点 軒丸瓦2点、平瓦2点、鴟尾3点、壁片1点 土製品1点、木製品1点	3箱	13箱	20箱

Ⅱ-1 平安京右京五条四坊二町跡、西京極遺跡 No.65 (24H464)

1. 調査にいたる経緯と経過

調査地は、市立四条中学校の南西に位置する。平安京の復元では右京五条四坊二町の東南辺に相当し、敷地の東辺が木辻大路の路面にかかる。また敷地の南辺は弥生時代～古墳時代の集落遺跡である西京極遺跡に接する。今回、この区画に共同住宅の建設が計画されたため、試掘調査を実施した。

周辺では、南東へ150 m隔てた区画において2006年度に発掘調査が行われており、底をもつ掘立柱建物が重複して検出されている(図2①)。木辻大路に近い西辺では南北溝が確認されており、宅地内溝として報告されている。また、調査地の北に接する区画では、2017年度に試掘調査が行われており、平安時代～室町時代の南北溝が確認されている(同②)。

なお、①②ともに平安時代遺構面の下層で古墳時代に遡る遺構群が検出されており、西京極遺跡がさらに北へ広がる可能性が指摘されている。以上のことから、今回の調査地においても連続する遺構面の存在が予測された。

試掘調査は、令和6年6月5日に実施した。調査区は、建物の長軸にあわせて3箇所を設定した(図3)。調査面積は合計34.0 m²である。

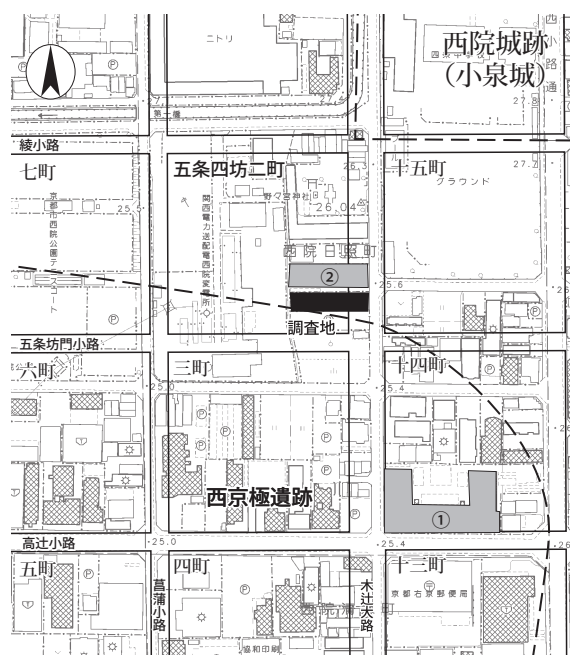


図2 調査位置図(1:5,000)

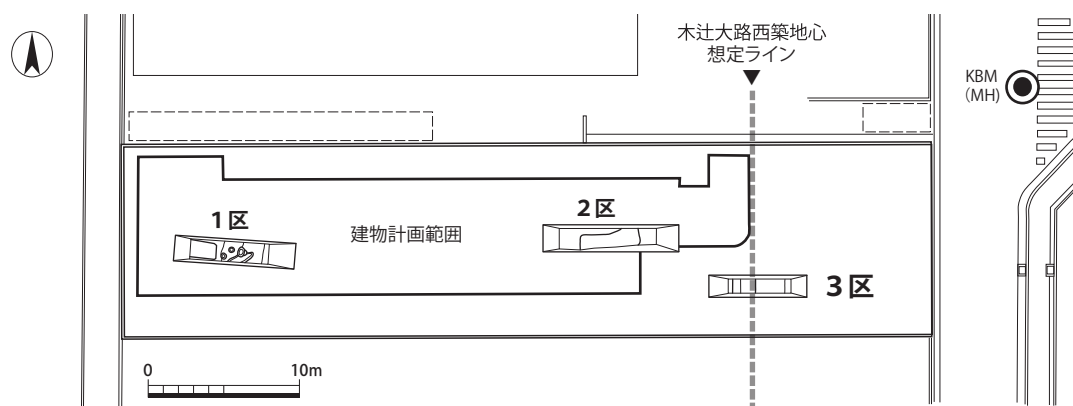


図3 調査区配置図(1:500)

2. 調査成果

西半部に設定した1区では、GL-0.95 mで旧耕作土、-1.2 mで黒褐色微砂混じりシルトの中近世耕作土、-1.3 mで黒褐色微砂混じり粘土質の土壤化層、-1.4 mで暗褐色細砂混じり粘土質シルトの地山に至る。土壤化層の上面において、溝状に広がる落ち込みやピットを確認した。

ピット1 1区の中央付近で検出したピットである。平面形状は楕円形で長径0.6 m、短径0.4 mを測る。埋土は、黒褐色微砂混じり粘土質シルトににぶい黄褐色細砂混じりシルトブロックが混じる。遺物の出土は確認できなかった。

ピット2～4 1区の中央付近で検出した遺構群である。このうちピット2はピット1と切り合い関係にある。平面形状はいずれもややいびつな円形で、長径0.35 mを測る。埋土は黒褐色微砂混じりシルトを主体とする。遺物の出土は確認できなかった。

溝5 1区東半部で検出した遺構である。南北方向へのびる溝状で、南辺で溝幅が広がる。検出長は1.3 m、最大幅は2.2 mを測る。断面形状は皿形で、最大深度は0.25 mである。埋土はブロック土を含む黒褐色微砂混じりシルトである。遺構内から土師器皿の細片が出土した。平安時代～室町時代の遺構である。

土坑6 2区で検出した遺構である。平面形状が不定形であるため土坑としたが、北から屈曲して南へ下がる溝状遺構の可能性もある。検出長は1.2 m、最大幅は4.0 mを測る。埋土はオリーブ褐色細砂混じりシルトを主体とし、下層の土壌下層を母材とする黄灰色細砂ブロックを少量含む。遺構内からは土師器の小片が出土したが、時期の確定には至らなかった。遺構の性格は不明である。

溝7 建物計画範囲外ではあるが、木辻大路との関連性を確認するために3区を設定した。

溝7は3区東端で検出した遺構で、南北方向に主軸をもつ。検出長0.9 m、上端の最大



図4 1区全景（南西から）

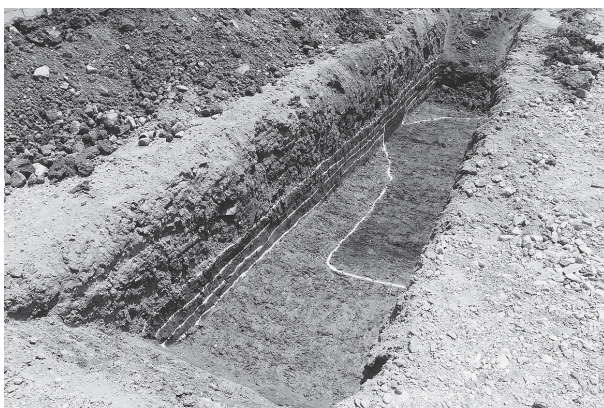


図5 2区全景（南西から）



図6 3区全景（南東から）

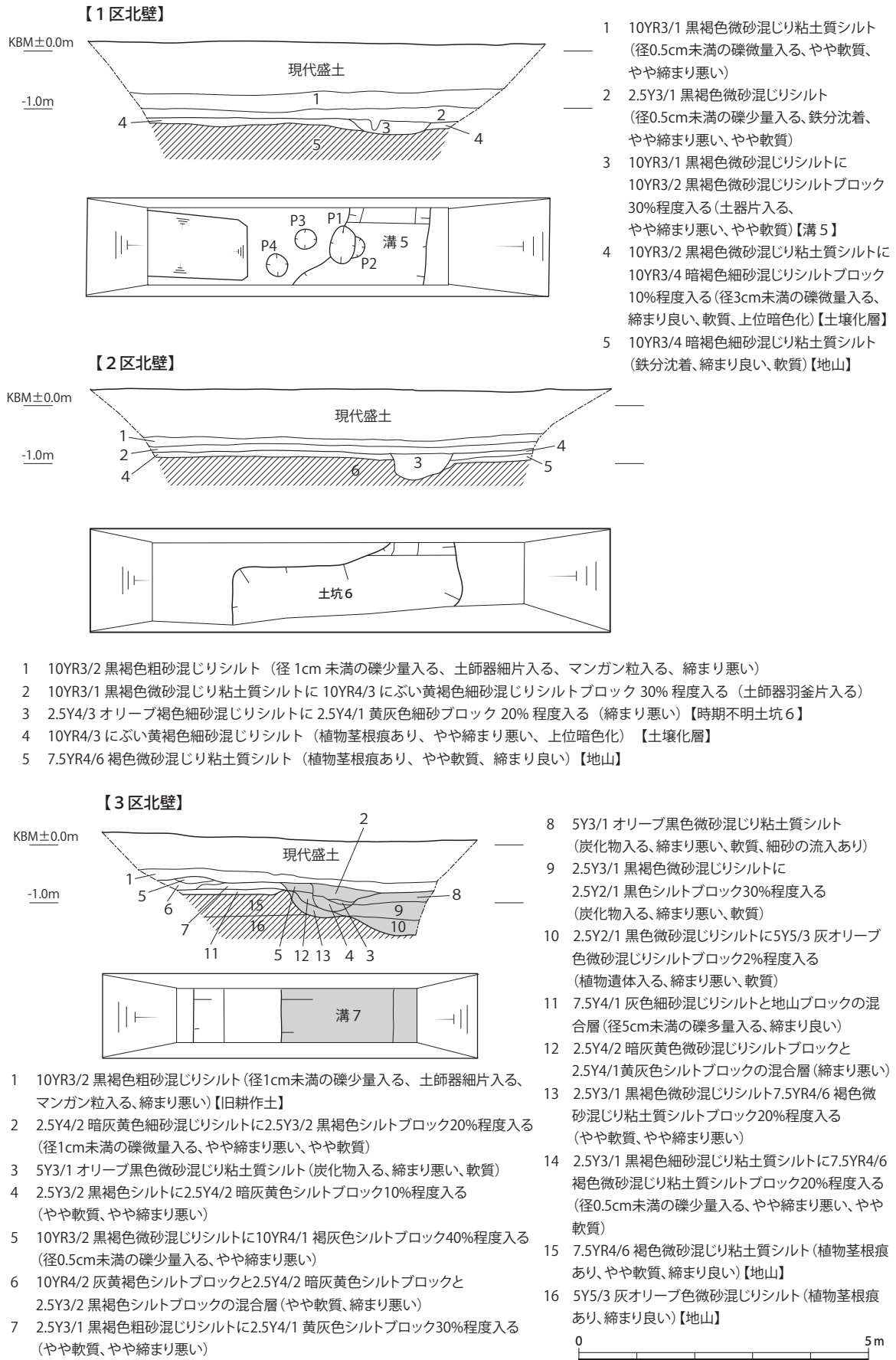


図7 調査区平面断面図 (1:100)

幅は 2.6 m、最大深度は 0.75 mを測る。埋土は新旧に大別でき、埋没経過に差があることを示す。溝斜面に段が認められるのは、複数回の掘り直しによるものか。埋土から遺物の出土は確認できなかった。

溝 7 は、木辻大路の西側築地心の推定ラインに接することから、大路の西側側溝となる可能性がある。また、溝 7 より西（町内側）には複数のブロック土が混交する層の高まりがあり（図 7 3 区 6・7 層）、築地に関連する遺構となる可能性がある。

3. まとめ

以上、平安京右京五条四坊二町跡及び西京極遺跡の試掘調査成果について記述した。調査地の周辺ではこれまでも複数回の調査が行われているが、木辻大路に関連する遺構の検出は計 3 件にとどまる。このうち 1 件では東側溝を確認しているが、他 2 件は宅地内溝の検出である。今回確認した溝 7 が大路側溝であるならば、木辻大路西側溝としては初の検出例となる。

なお、今回の調査においても平安時代以前に遡る遺構を確認した。西京極遺跡が北へ広がることを追認する成果として掲げておきたい。

（黒須亜希子）

引用文献

調査①：（財）京都市埋蔵文化財研究所 2006 年『平安京右京五条三坊十四町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-7

調査②：京都市文化市民局 2019 年「Ⅵ 調査一覧表」『京都市内遺跡試掘調査報告』平成 30 年度

参考文献

京都市文化市民局 2013 年「Ⅵ 試掘調査一覧表」『京都市内遺跡試掘調査報告』平成 24 年度

Ⅱ-2 平安京右京六条三坊六町跡 No.69 (24H421)

1. 調査の経緯 (図8・表2)

本件は、共同住宅新築工事に伴う試掘調査である。対象地は五条西小路の交差点から南東へ約 170 m に位置し、平安京右京六条三坊六町跡の南西隅にあたる。対象地西端には馬代小路東築地心、南側には楊梅小路の北築地心が想定される。

周辺では、発掘調査(調査1～4)や試掘調査(調査5～12)が数多く行われている(表1)。調査1では平安時代前期の掘立柱建物や柵列を確認している。調査2では樋口・馬代小路に伴う条坊遺構、掘立柱建物、町内道路などが確認され、一町規模の宅地利用の様子が明らかになっている。また「讃岐国苅田郡白米」と記された木簡、人形や馬の骨等の祭祀遺物も出土しており、京内官衙があった可能性が指摘される。調査3では平安時代の掘立柱建物、

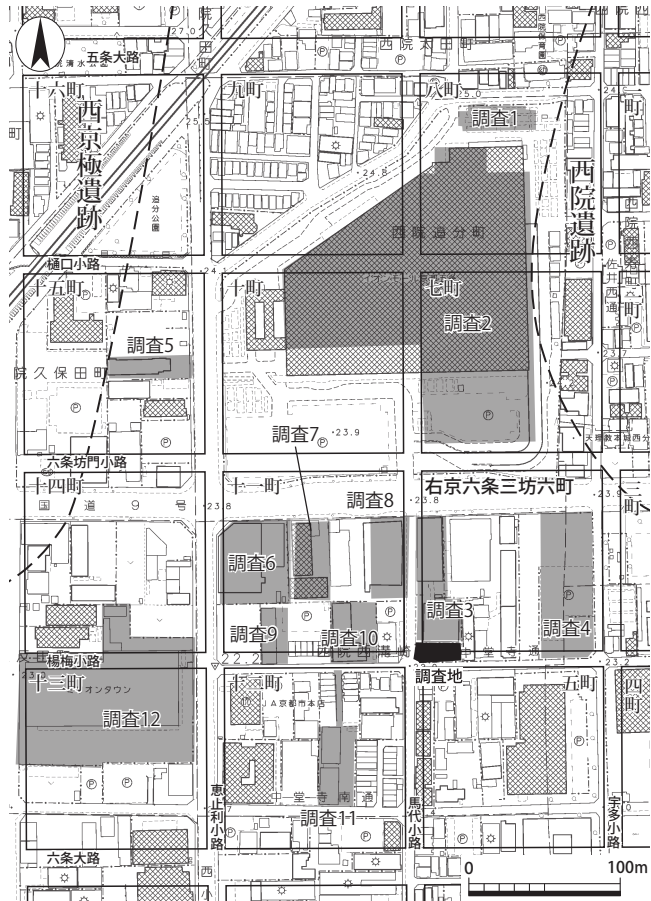


図8 調査位置図 (1:5,000)

井戸、流路化した馬代小路東側溝(溝35)が確認され、井戸からは人名が墨書された男女一組の人形が出土している。調査4では平安時代の掘立柱建物、柵列、溝などが多数確認されている。このように対象地周辺では1/2町以上での宅地利用が行われていることが明らかとなっている。また西小路通を挟んだ西側の調査12でも楊梅小路両側溝などが確認され、宅地が形成されていることがわかっている。しかし、対象地を含む同町内、及び西側にあたる十一・十二・十五町で行われた調査5～11では遺構面は広がるものの遺構の展開は稀薄であり、湿地状堆積が確認されるのみである。今回の調査は令和6年11月15日に実施し、調査区の面積は合わせて39㎡である。

2. 調査成果 (図9・10)

調査地は、敷地西側(1区)と南側(3区)に条坊関連遺構の確認のための調査区を、町内の遺構展開を確認するための調査区(2区)の計3箇所設けた。

いずれの調査区も、現代盛土の下、近世の耕作土を挟み、GL-0.6～-0.8mで灰黄褐色微砂混じりシルトの地山に至る。遺構検出は地山上面で行った。1区の西端で南北方向の溝(溝1)の東

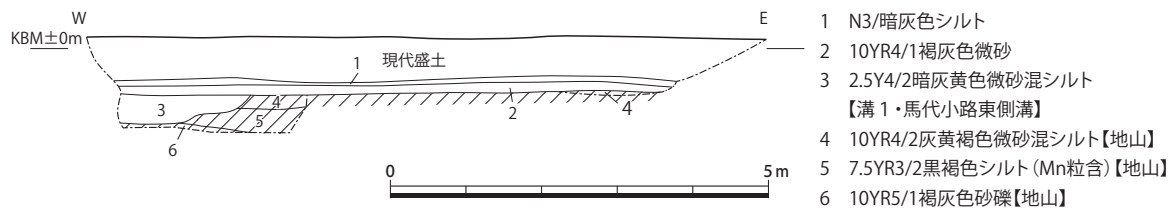


図9 1区北壁断面図 (1:100)

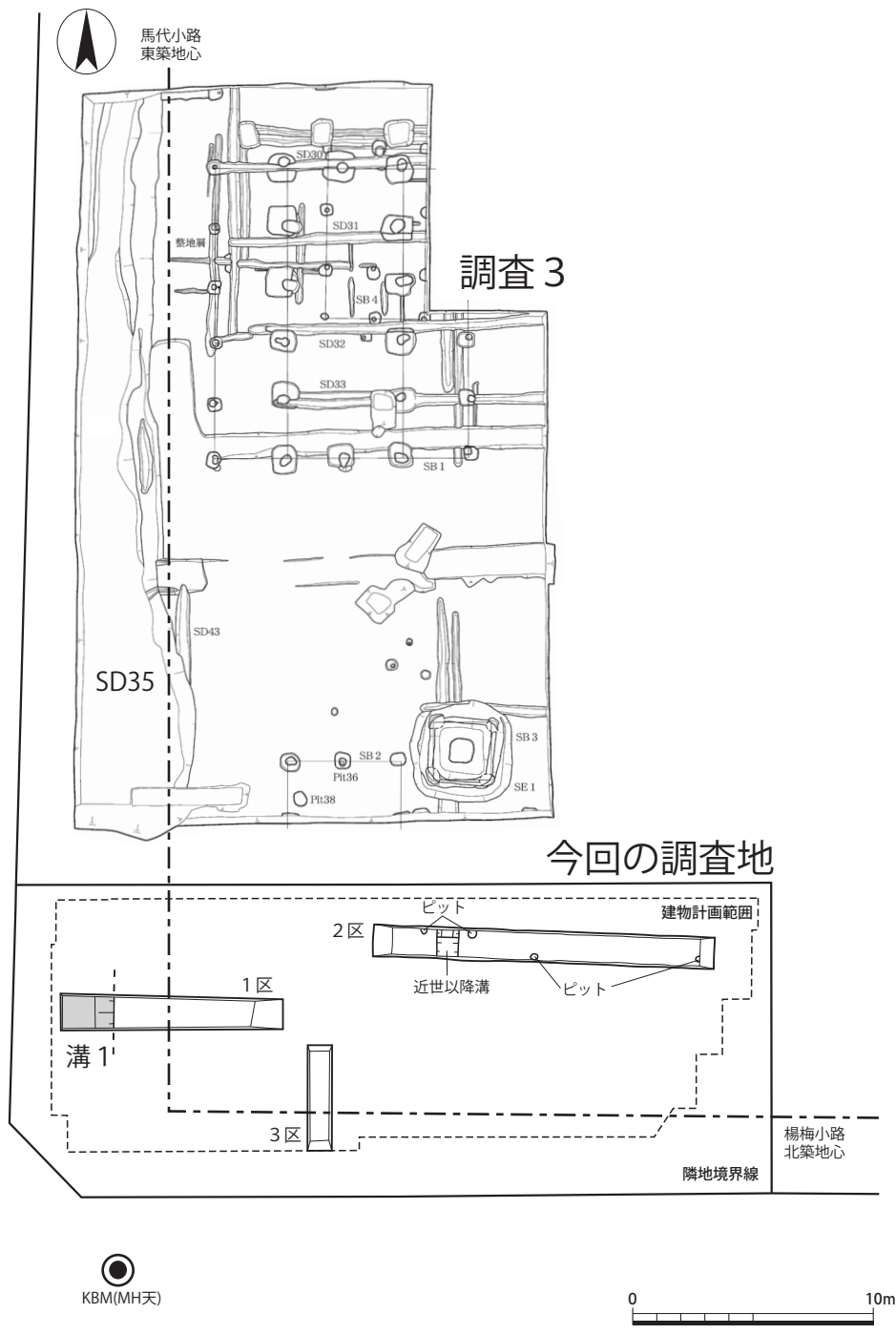


図10 調査区配置図及び調査3遺構位置図 (1:300)

肩を確認した。調査3で確認されている馬代小路東側溝（SD35）の延長にあたることから、溝1は馬代小路東側溝と考えられる。2区では近世以降の溝と時期不明のピットを4基確認した。3区では、楊梅小路に関わる東西溝（北側溝や内溝）は確認できなかった。いずれの遺構でも遺物は細片で、時期を特定できるものは確認していない。遺構密度は希薄であった。

3. まとめ

今回の調査では、調査3で確認されていた馬代小路東側溝の延長を確認した。しかし調査3で確認されている建物などに関連する遺構は確認できず、宅地内での遺構展開は希薄であったと考えられる。調査3や4では1/2町での土地利用が想定できることから町の南西隅にあたる対象地は積極的に利用されていなかったと推測できる。

（奥井智子）



図11 1区全景（南西から）



図12 1区溝1断面（南から）

表2 調査一覧（図8に対応）

調査No.	文献名	発行年
調査1	「平安京右京六条三坊」『平成2年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所	1994
調査2	『平安京右京六条三坊』平安京跡研究調査報告第20輯（財）古代学協会	2004
調査3	『平安京右京六条三坊六町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2004-2（財）京都市埋蔵文化財研究所	2004
調査4	『平安京右京六条三坊六町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2023-1（公財）京都市埋蔵文化財研究所	2023
調査5	15H602「Ⅲ-1 平安京右京六条三坊十五町跡 No.13」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成28年度』京都市文化市民局	2017
調査6	18H290「Ⅵ 調査一覧表 No.100」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成30年度』京都市文化市民局	2019
調査7	03H328「Ⅴ 試掘調査一覧表 No.37」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成15年度』京都市文化市民局	2004
調査8	08H529「Ⅵ 試掘調査一覧表 No.10」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成21年度』京都市文化市民局	2010
調査9	10H407「Ⅴ 試掘調査一覧表 No.9」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成23年度』京都市文化市民局	2012
調査10	13H245「Ⅵ 試掘調査一覧表 No.78」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成25年度』京都市文化市民局	2014
調査11	19H798「Ⅵ 試掘調査一覧表 No.68」『京都市内遺跡試掘調査報告 令和2年度』京都市文化市民局	2021
調査12	13H275「Ⅳ-3 平安京右京六条三坊十三・十四町跡 No.79」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成25年度』京都市文化市民局	2014

Ⅲ-1 嵯峨遺跡 No.18・84 (23S450)

1. はじめに

本件は福祉施設建設に伴う試掘調査である。令和6年1月17日に試掘調査をしたところ、遺構が複数検出された。この結果を受けて、設計変更が計画され、建物の掘削は保護層上面のGL-0.15 mまでに収まり、遺構は地中に保存されることとなった。ただし、階段の基礎部・エレベーターピットについては掘削深度が遺構面に及ぶため、同年5月8～10日に追加で記録調査を行った。調査面積は合わせて88㎡である。

2. 遺構

1～3区で確認された本調査地の基本層序はGL-0.45 mで黒褐色泥砂、-0.6 mで黄褐色シルトの地山である。追加調査の4・5区でも、基本層序は同様であった。

4・5区の調査成果

4区

既存建物の解体攪乱により大部分がGL-1.3 mまで削平されていた。北端の一部ではGL-0.6 mの深さで遺構面がわずかに残っており小穴、土坑を検出した。



図13 調査位置図 (1 : 5,000)

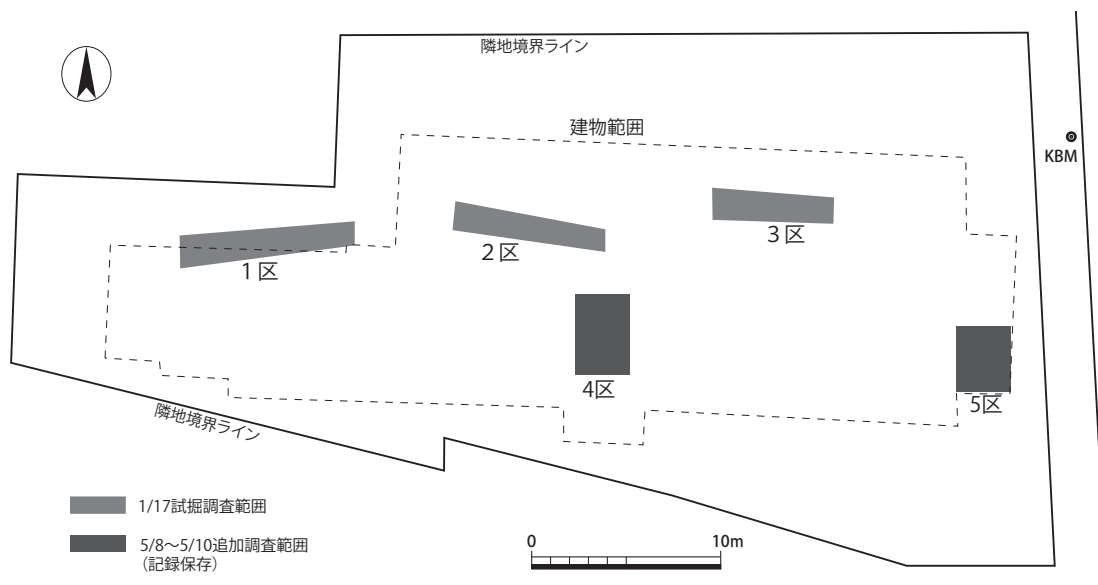


図14 調査区配置図 (1 : 400)

土坑 3：トレンチの北端で検出した土坑である。調査区の北側に続く。調査区内では上部を攪乱されており、深さ 0.1 m ほどを掘削した。底部を検出したため不定形である。北壁で確認できる深さは約 0.4 m、埋土は暗オリーブ褐色砂質土である。少量であるが 9 段階に属する土師器皿が出土した。15 世紀前半の遺構と考えられる。

5 区

5 区は調査区の西半が攪乱で削平されていたが、部分的に 2 面の遺構面を確認し、溝や土坑を検出した。なお 2 面の遺構は、事前協議の掘削深度よりも深かったため、検出したのみで掘削していない。

溝 11：GL-0.45 m（第 1 面）で検出した北西から南東方向の溝である。西肩は攪乱されている。南壁で確認した幅は 1 m、深さは 0.4 m で、埋土は明黄褐色シルトのブロックを多量に含む灰黄褐色泥砂である。土師器皿、青磁椀が出土した。16 世紀前半の遺物と考えられる。

ピット 17：直径 0.3 m の小穴である。埋土は灰黄褐色砂泥である。15 世紀後葉～16 世紀前葉の土師器皿が出土した。

土坑 16：調査区の南側で検出した土坑で検出幅は 1.8 m である。調査区外に続いている。深さ 0.2 m 以上、埋土は黒褐色泥砂である。青磁盤が出土した。

土坑 14・15：調査区の中央で検出した土坑で、北端を井戸 13 に切られている。土坑 14 は直径 2.2 m の円形、土坑 15 は一辺 2.6 m の隅丸方形を呈している。埋土は土坑 14 が黒褐色泥砂、土坑 15 が明黄褐色シルトブロックを含む黄灰色泥砂である。未掘削のため詳細は不明だが井戸の可能性はある。

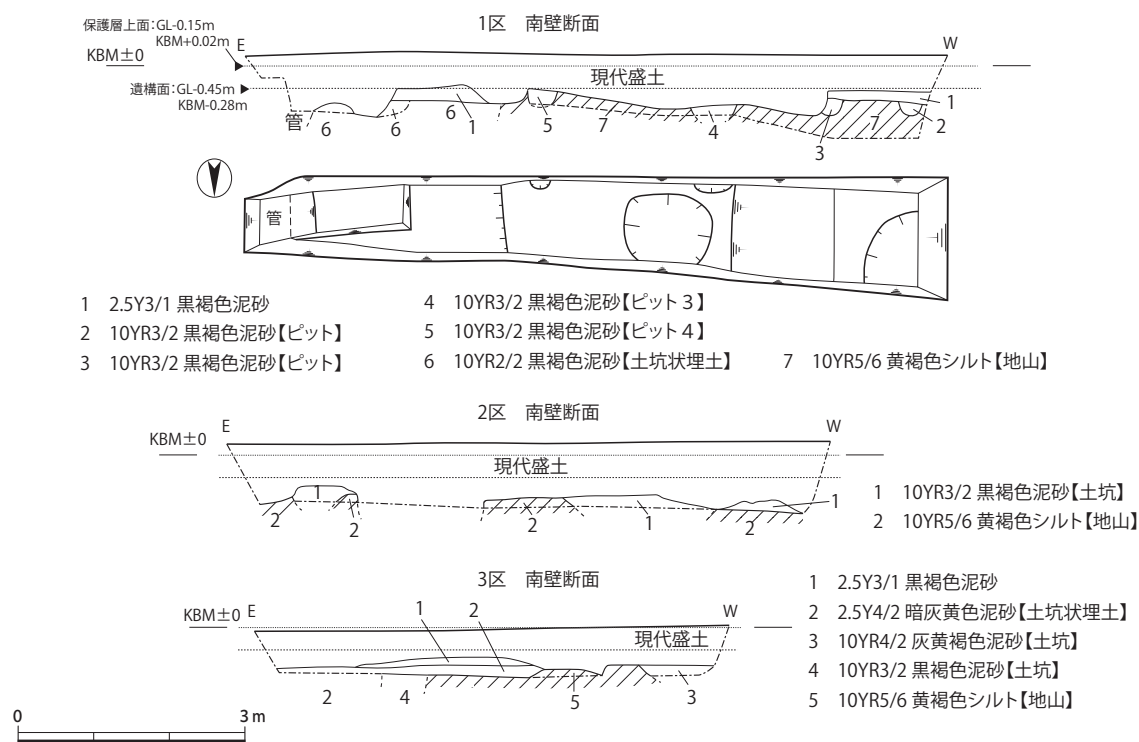


図 15 1 区平・断面図 2・3 区断面図 (1:100)

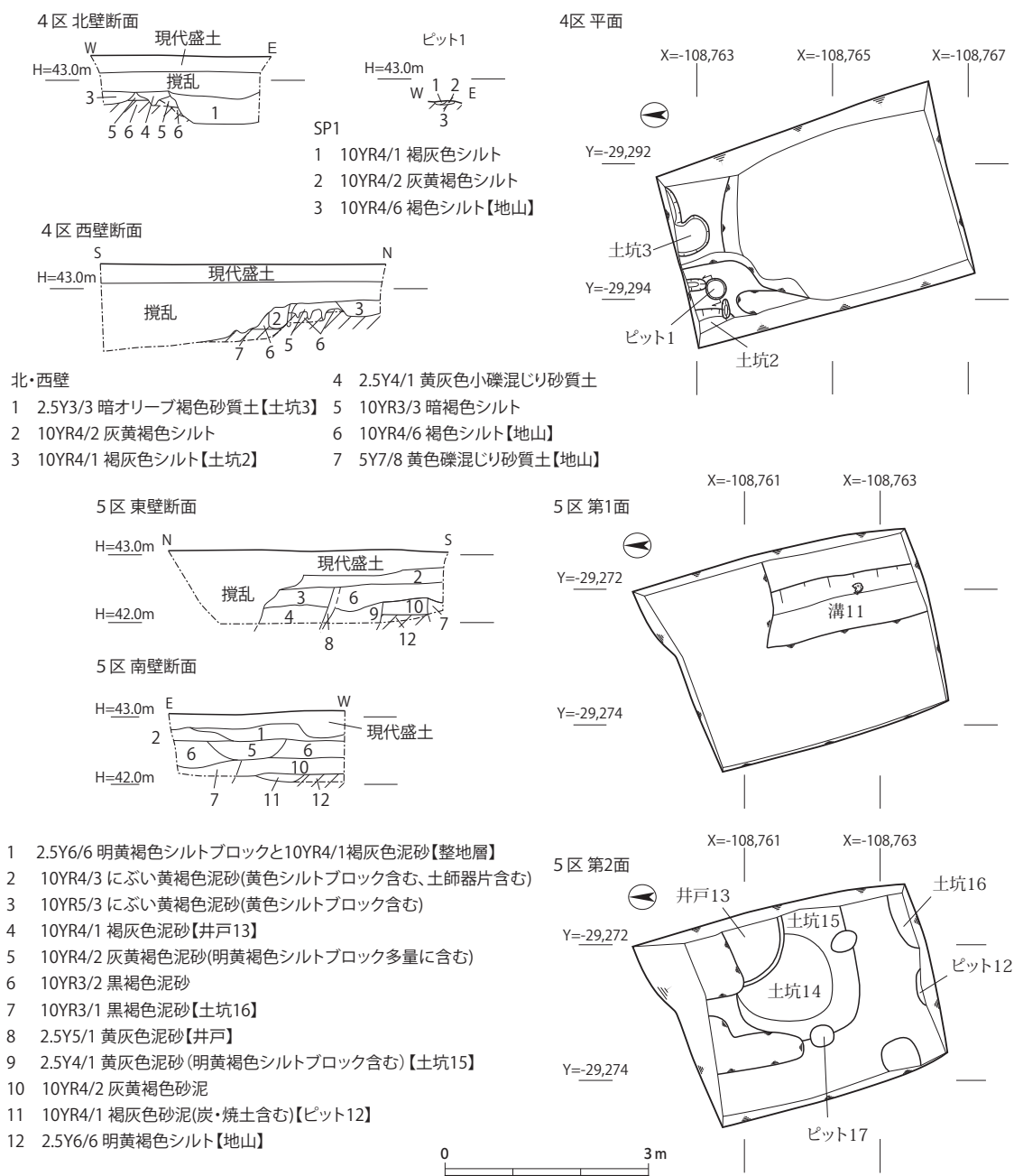


図16 4・5区平・断面図（1：100）

井戸13：調査区の中央で検出した井戸で北半を攪乱されており、東半は調査区外に続く。半径0.9mの円形を呈し、外側には幅0.1mの漆喰井戸枠の痕跡が残る。東壁で確認できる深さは0.5mで埋土は2層に分かれ上層は黄色シルトブロックを含むにぶい黄褐色泥砂、下層は褐灰色泥砂である。近世か。

3. 遺物

遺物量は少ないが土師器、青磁などが出土した。

1は土師器皿Sで口径11.2cm、土坑3から出土した。9段階の古い側に属すると考えられる。15

2は土師器皿 Sh で口径 7.5cm、3は S で口径 12.0cmである。ピット 17 から出土した。数が少なく詳細は不明だが、16 世紀前後の遺物と推測される。

4 は土師器皿 S、5 は青磁碗である。溝 11 から出土した。4 は口径 12.4cm である。5 は龍泉窯系青磁の碗で無文である。16 世紀前半の遺物と考えられる。

4. まとめ

今回の調査では狭小な面積でありながら、15・16世紀の遺構が検出された。青磁椀が出土した溝11は東に接する現代の道と並行している。少なくとも大正時代の都市計画図上ではこの道を確認することができるが、出土遺物の年代観から道が室町時代に遡る可能性が見えてきた。

当該地の南には臨川寺、南西には天龍寺が所在し、15・16世紀は周辺一帯が発展した時期である。仔細は不明な点も多いが、中世遺構の検出が増えれば、見えてくることもあるだろう。今後も調査を積み重ねていきたい。

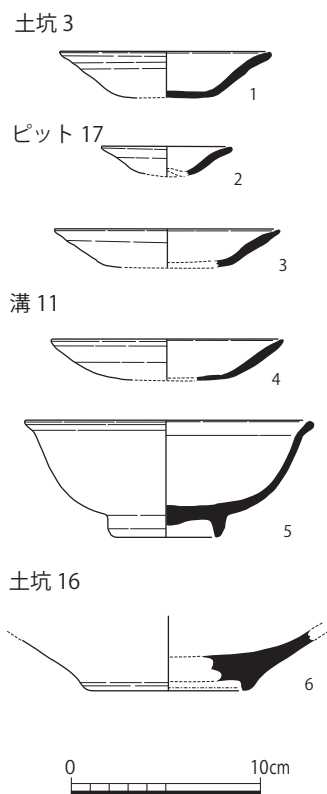


図17 出土遺物実測図
(1:4)

(赤松佳奈)



図18 調査地と周辺の寺院の位置関係（大正の都市計画図）（1：10,000）

Ⅲ-2 嵯峨野高田町遺跡 No.91 (22S603)

1. 調査の経緯 (図19・20)

本件は宅地造成に伴う試掘調査である。調査地は右京区嵯峨野南浦町に位置し、周知の埋蔵文化財包蔵地である嵯峨野高田町遺跡に該当する。本遺跡は古墳時代後期～平安時代にかけての集落跡である。

令和6年6月28日に試掘調査を実施し、宅地造成工事に伴う道路敷設予定位置に調査区を3箇所設けた。調査面積は計26㎡である。

調査の結果、古墳時代の土坑群・ピット・落込みなどを検出し、遺跡が敷地全域に広がっていることを確認した。申請者と協議を行い、設計変更により遺構は地中保存されることとなった。

なお、遺構面に抵触した部分については詳細分布調査で記録保存することとなり、8月5日から10月16日にかけて調査を実施した。今回の報告では、試掘調査で遺構が密に検出した1区と併せて、平安時代～古墳時代の遺物を確認した詳細分布調査のNo.4・7地点についても報告する。

これまで嵯峨野高田町遺跡では、広域立会調査2件(調査①・②)と発掘調査2件(調査③・④)が実施されている。広域立会では顕著な遺構の確認には至らなかったものの、古墳時代の須恵器などの遺物が確認された^{1)・2)}。平成24年の調査③では、弥生時代～古墳時代の建物跡・溝などが確認され、遺物も多量に出土した³⁾。令和4年の調査④では、飛鳥～奈良時代の竪穴建物が4棟、平安時代の柱穴などが確認された⁴⁾。以上のように、嵯峨野高田町遺跡の調査

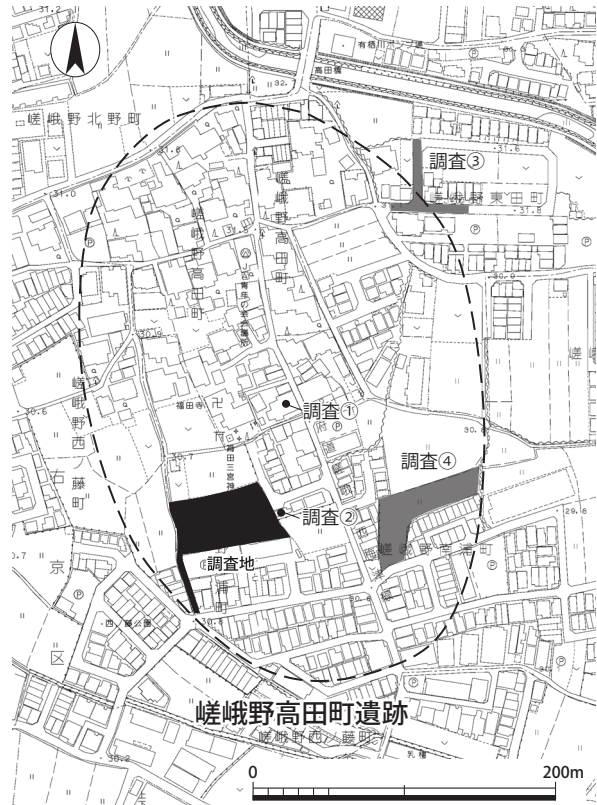


図19 調査位置図(1:5,000)

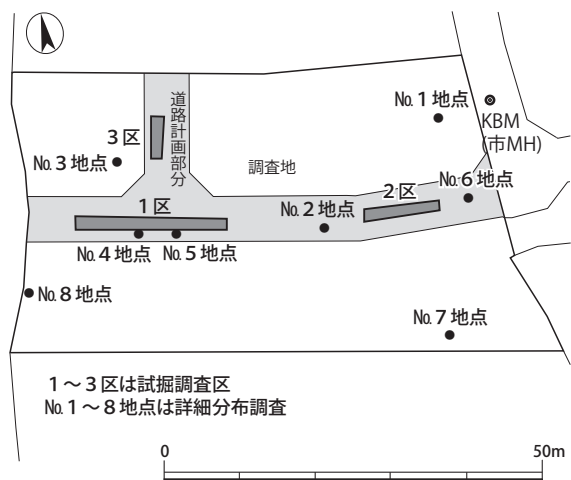
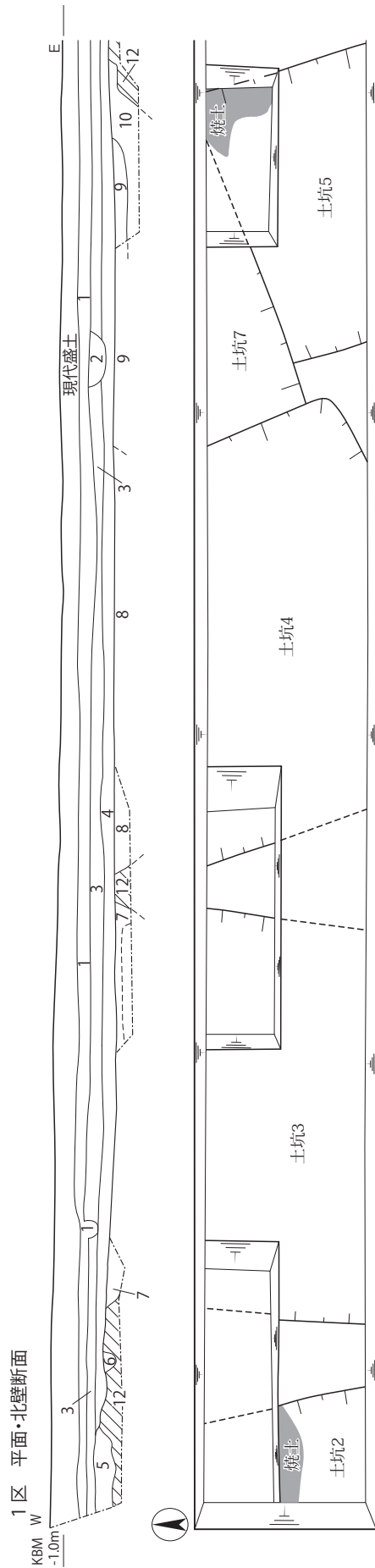


図20 調査区配置図(1:1,000)



- 1 10YR4/3にぶい黄褐色シルトブロックと10YR5/3にぶい黄褐色シルトの混合層(鉄分沈着)【近世耕作土】
- 2 2.5Y4/2暗灰黄色細砂混じりシルト(2.5Y5/1黄灰色細砂混じりブロック10%程度入る、土器片・炭入る、やや締まり悪い)【土坑1】
- 3 2.5Y4/2暗灰黄色細砂混じりシルト(ϕ 0.5cmの礫少量入る、マンガング粒入る、土器片入る、締まり悪い)【中世地層】
- 4 10YR4/2灰黄褐色細砂混じりシルト(地山ブロック10%程度入る、マンガング粒入る、古墳時代の土器片入る、やや締まり悪い)【整地層】
- 5 2.5Y3/2黒褐色細砂混じりシルト(ϕ 3cm未満の礫少量入る、土器片・炭入る、やや締まり悪い)【土坑2】
- 6 2.5Y3/3暗オリーブ褐色細砂混じりシルト(ϕ 0.5cm未満の礫少量入る、締まり悪い)
- 7 10YR3/3暗褐色細砂混じりシルト(地山ブロック10%入る、土器片入る、やや締まり悪い)【土坑3】
- 8 10YR3/4暗褐色微砂混じりシルト(地山ブロック5%入る、土器片入る、やや締まり悪い)【土坑4】
- 9 10YR4/2灰黄褐色細砂混じりシルト(地山ブロック5%程度入る、土器片・炭入る、やや締まり悪い)【土坑7】
- 10 10YR3/3暗褐色微砂混じりシルト(地山ブロック10%程度入る、 ϕ 1cm未満の礫少量入る、土器片・炭入る、やや締まり悪い)【土坑5】
- 11 2.5Y3/2黒褐色細砂混じりシルト(地山ブロック20%程度入る、 ϕ 2cm未満の礫少量入る、土器片・炭入る、焼土入る、やや締まり悪い)【土坑6】
- 12 10YR4/4褐色砂質シルト(締まり良い)【地山】

- ビット8 10YR2/1黒色細砂混じりシルト(地山ブロック5%程度入る、土器片・炭入る、焼土入る、締まり悪い)
- 土坑9 10YR4/2灰黄褐色細砂混じりシルト(地山ブロック30%入る、土器片入る、やや締まり悪い)
- 土坑10 10YR3/3暗褐色細砂混じりシルト(土器片・炭入る、やや締まり悪い)

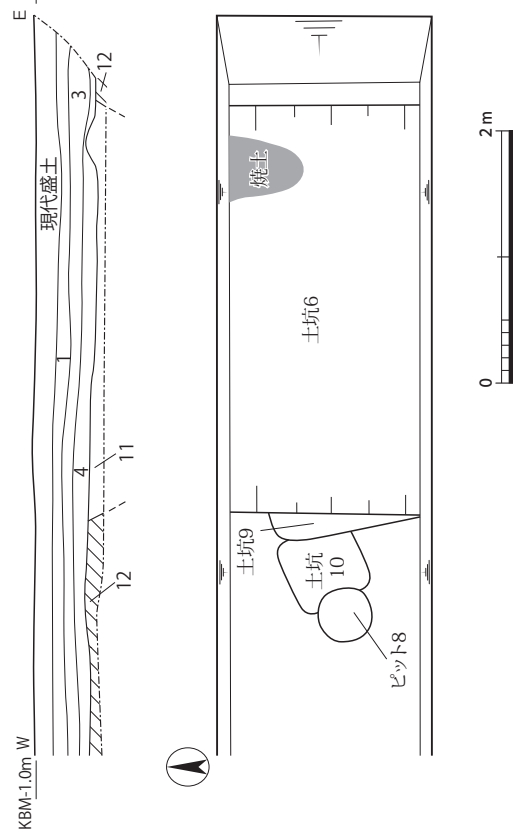


図21 1区平・断面図(1:60)

件数は少数で不明な点が多い状況であるが、徐々に集落の様相が明らかになり始めている。

2. 層序と遺構（図21・22）

基本層序は GL-0.2 m で近世耕作土（1 層）、-0.3 m で暗灰黄色細砂混じりシルトの中世整地層（3 層）、-0.4 m で灰黄褐色細砂混じりシルトの平安時代の整地層（4 層）、-0.5 m で褐色砂質シルトの地山（12 層）である。

試掘調査 1 区

1 区の地山上面で土坑、ピットなどを確認した。

土坑 2 調査区西端で検出した。東西 0.6 m 以上、南北 1.3 m 以上で深さは 0.16 m である。埋土は黒褐色細砂混じりシルトである。土師器片を含む。東西 0.75 m 幅で焼土を確認した。

土坑 3 調査区中央付近で検出した。東西 3.1 m 以上、南北 1.2 m 以上である。埋土は暗褐色細砂混じりシルトである。6 世紀頃の土師器片が出土した。

土坑 4 調査区中央付近で検出した。東西 3.7 m で南北 1.7 m 以上である。南西角部分を確認した。埋土は暗褐色微砂混じりシルトである。

土坑 5 調査区東側で検出した。東西 2.2 m、南北 1.2 m 以上である。深さは 0.2 m 以上である。埋土は暗褐色微砂混じりシルトである。東西 0.45 m、南北 0.6 m の範囲で焼土を確認した。

土坑 6 調査区東側で検出した。東西 2.7 m、南北 1.2 m 以上である。深さは 0.1 m 以上である。埋土は黒褐色細砂混じりシルトである。上面で南北 0.5 m 以上、東西 0.4 m の範囲で焼土を確認した。

土坑 7 調査区中央付近で検出した。土坑 5 を切って成立する。東西 2.8 m 以上、南北 0.9 m 以上で深さは 0.1 m である。埋土は灰黄褐色細砂混じりシルトである。その他、ピット 8、土坑 9・10 を確認した。

詳細分布調査

詳細分布調査は造成工事期間に、7 地点で調査を実施した。

No. 4 地点 GL-0.42 m ～ -0.69 m でオリーブ褐色細砂混じりシルトの旧耕土を確認し、土師器片、須恵器片が出土した。

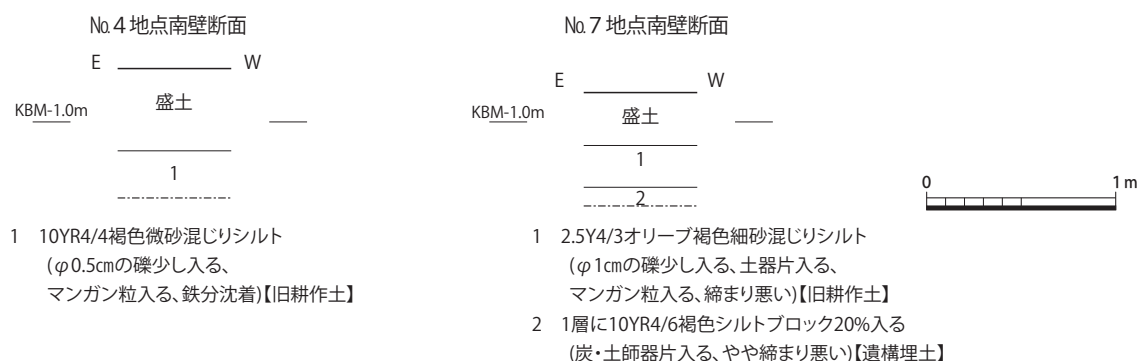


図22 詳細分布調査柱状断面図（1：40）

No. 7 地点 GL-0.28 mで褐色微砂混じりシルトの耕作土、-0.51 ～ -0.63 mで炭・土師器片・褐色シルトブロックを含むオリーブ褐色細砂混じりシルトである。土師器・須恵器片が出土した。2層については遺構埋土の可能性が考えられる。

3. 遺物（図23）

出土した遺物で図化できるものは少数であった。1・5はNo.7の1層から、2はNo.4の掘削中、3・4は試掘調査1区の3層から出土した。いずれも混入品である。

1と2は土師器皿の口縁部である。3は須恵器の杯Hの身である。古墳～飛鳥時代のものと考えられる。4と5は須恵器の杯Bの高台部である。高台は低く断面が方形で底が平らになっている。平安時代前期のものである。

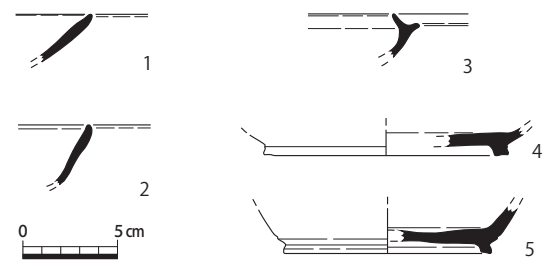


図23 遺物実測図（1：4）

4. まとめ

今回の調査で土坑群・ピットなどを確認した。土坑2～6については遺構面において焼土が確認された。また、土坑2・3の下層については判然としないものの、断面の肩部分に壁溝と考えられるくぼみのような状況が見られた。土坑の広さ、平面で肩部分が直線にのびることから、土坑2～7は竪穴建物の可能性も考えられる。

今回の調査で遺構が多数確認されたことから、古墳時代の集落が遺跡範囲の西側まで及んでいることを確認できた。少しずつではあるものの、遺跡の様相が分かる資料が増加している。今後も、集落がどの範囲まで広がるのか資料の増加を期待する。

（清水早織）

註

- 1) 調査① 加納敬二ほか『京都嵯峨野の遺跡 広域立会調査による遺跡調査報告』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊、(財)京都市埋蔵文化財研究所、1997年。
- 2) 調査② 1)に同じ
- 3) 調査③ 高見澤太基『嵯峨野高田町遺跡』発掘調査報告書第5集、(株)日開コンサルタント、2015年。
- 4) 調査④ 早見由槻『嵯峨野高田町遺跡発掘調査報告書』文化財サービス発掘調査報告書第27集、(株)文化財サービス、2022年。

Ⅲ-3 植物園北遺跡 No.95 (24S174)

1. 調査にいたる経緯と経過 (図24)

調査地は、市立上賀茂小学校の南西に位置し、弥生時代～古墳時代の集落遺跡である植物園北遺跡の南西辺にあたる。今回、この地点において、開発に伴う地中埋設物の掘削探査が計画されたため、事前に埋蔵文化財の試掘調査を実施した。

植物園北遺跡は賀茂川が形成した扇状地上に展開する遺跡で、これまでも複数の調査が行われている¹⁾。上賀茂小学校内で行われた発掘調査(調査①～③)では、弥生時代後期～古墳時代の流路とともに、竪穴建物や掘立柱建物が複数確認されている。また北の丘陵上には多数の群集墳が築かれていることから、その造墓集団として一定以上の人口を有するムラが存在したと考えられる。

一方、平安時代以後は、遺跡の北西に位置する上賀茂神社が皇室や貴族の崇敬を集めたことにより、関連資料が残された。1017年(寛仁元)、後一条天皇が母后である藤原彰子とともに行幸した際、神社に所領を寄進した。これが後に荘園化し、神社を支える経済的基盤となった。その門前には神職(神人)や農民、町人が集住し、神社の南東に社家町が形成された。令和5年度に行われた発掘調査(調査⑤)では、室町時代の柱穴や大規模な整地跡が確



図24 調査位置図 (1 : 5,000)

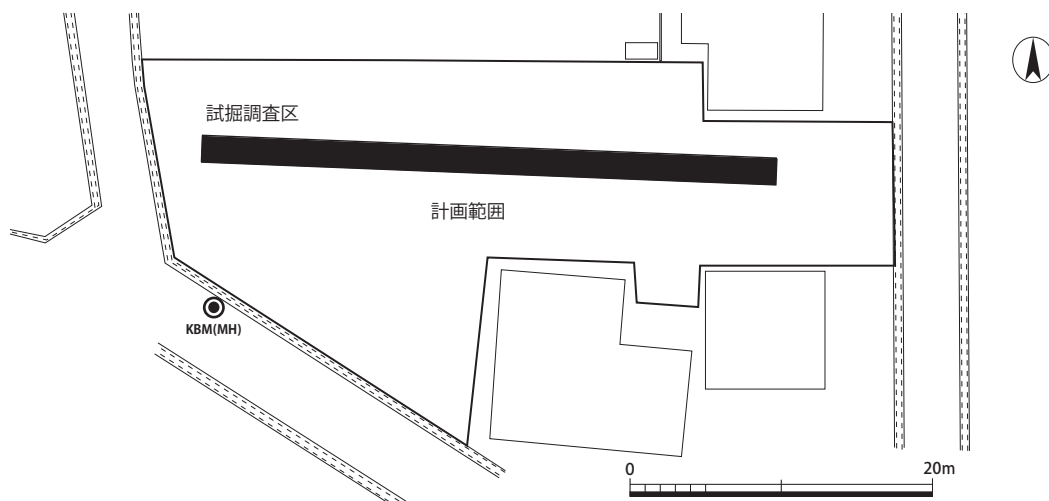


図25 調査区配置図 (1 : 500)

認されており、社家町の形成が室町時代に遡ることを裏付ける資料とされている。

以上のことから、今回の調査においても複数時期に渡る遺構の存在が予測された。調査の実施日は、令和6年7月2日、調査面積は61.0 m²である。調査の結果、ピットや溝を有する遺構が確認されたため、計画されていた掘削探査は中止となった。

2. 調査成果（図25～29）

調査区は、対象地の長軸に合わせて東西方向に設定した。掘削の結果、GL-0.3～-0.5 mまで盛土、以下、暗灰黄色粗砂混じりシルトの地山を確認した。この地山上面において、平安～室町時代の遺構面を検出した（図26・27・29）。

土坑1 調査区の東端で確認した遺構である。検出南北長0.9 m、東西幅2.5 mを測る。埋土は黒褐色粗砂混じりシルトを主体とし、炭化物や人頭大の礫を含む。遺構内から土師器皿と灰釉陶器の破片が出土した。遺構の性格は不明である。

溝2 土坑1の西側で検出した溝である。検出長1.4 m、最大幅0.45 mを測る。南北方向へ直線的にのび、調査区外へと続く。断面形状は椀形で、最大深度は0.3 mである。埋土は地山ブロックを含む黄灰色粗砂混じりシルトで、拳大の礫を少量含む。遺構内から土師器皿の破片が出土した。



図26 土坑1検出状況（南西から）

ピット3・4 調査区西半部で検出した遺構である。平面形状はともに楕円形で、長径0.5 m、短径0.4 mを測る。埋土は黒褐色細砂混じりシルトを主体とする。形状や埋土が近似すること、また中央に直径0.2 m程度の柱跡がともに残ることから、建物等の柱穴である可能性が考えられる。



図27 ピット検出状況（南から）

ピット3からは鎌倉時代の土師器皿の破片が出土した。またピット4からは、時期不明の土師器甕の破片が出土した。

ピット5 調査区北西部で検出した遺構である。平面形状は、直径0.35 mを測る円形である。断面形状は椀形、最大深度は0.25 mを測る。埋土は黒褐色細砂混

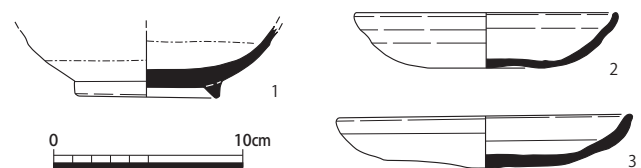


図28 出土遺物実測図（1：4）

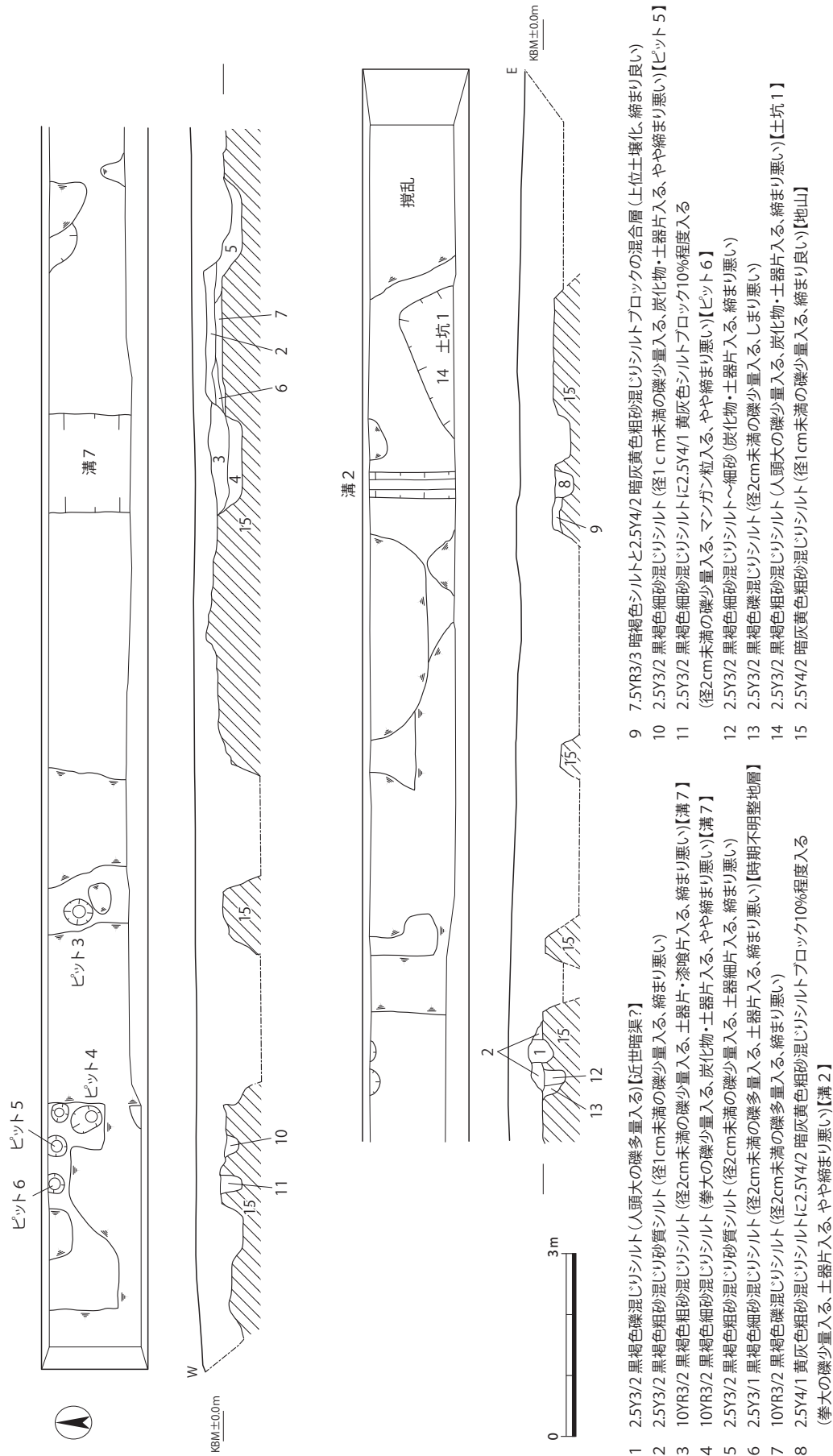


図 29 1 区遺構面平面断面図 (1 : 100)

じりシルトで、炭化物を多量に含む。遺構内から時期不明の土師器甕の破片が出土した。

ピット6 調査区北西部で検出した遺構である。平面形状は円形で、直径 0.33 mを測る。断面形状は深い碗形、最大深度は 0.35 mを測る。埋土は地山ブロックを含む黒褐色細砂混じりシルトを主体とする。遺構内から土師器壺（庄内式）の破片が出土した。

溝7 調査区中央付近で検出した遺構である。検出長 1.3 m、上端の最大幅は 1.8 mを測る。南北方向へ直線状にのび、調査区外へと続く。断面形状は逆台形に近く、最大深度は 0.6 mである。埋土のうち上層は近世堆積層、下層は黒褐色細砂混じりシルトを主体とする。下層からは土師器皿（14 世紀）の破片が出土した。室町時代の遺構である。

出土遺物 1 は灰釉陶器碗の底部である。外面には断面三角形を呈する高台を貼り付ける。灰釉はツケガケで、底部は内外面ともに露胎する。12 世紀の製品である。土坑 1 より出土した。2 はやや深さのある土師器の皿で、直径 14.0cm、高さ 3.0 m程度に復原できる。口縁部外面には 2 段のナデを施す。12 世紀の製品である。溝 2 より出土した。3 も同じく土師器の皿で、直径 15.0cm、高さ 2.6 mに復原できる。口縁部をやや厚く作り、外面に 1 段ナデを施す。12 世紀末～13 世紀初頭の製品である。ピット 3 より出土した。

このほか包含層からは緑釉陶器、白磁碗、土師器等、平安時代～室町時代の遺物が出土した。

3. まとめ

以上、植物園北遺跡の試掘調査成果を報告した。今回の調査では、平安時代後期～鎌倉時代、室町時代の遺構を複数検出した。上賀茂神社の社家町の形成は鎌倉時代以後とされるが、今回の調査成果は、それに先立つ時代の当該地域の様相を示すものと言える。社家町の形成過程を探る一資料として掲げておきたい。

（黒須亜希子）

註

1)

調査①：（財）京都市埋蔵文化財研究所 1996 年「Ⅵその他の遺跡 22 植物園北遺跡」『平成 5 年度京都市埋蔵文化財調査概要』

調査②：（財）京都市埋蔵文化財研究所 2002 年『植物園北遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2002-14

調査③：（財）京都市埋蔵文化財研究所 2022 年『植物園北遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2022-6

調査④：京都市文化観光局 1990 年『植物園北遺跡発掘調査概報』平成元年度

調査⑤：京都市文化市民局 2024 年「Ⅵ 植物園北遺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告』令和 5 年度

調査⑥：（財）京都市埋蔵文化財研究所 2011 年「Ⅲ その他の遺跡 2 植物園北遺跡」『昭和 55 年度京都市埋蔵文化財調査概要』

Ⅲ-4 木野墓窯跡 No.93 (24S357)

1. はじめに (図30)

本件は、左京区岩倉幡枝町 1067-4 他地内における公園施設整備計画に伴う試掘調査である。計画地の一部が周知の埋蔵文化財包蔵地の「木野墓窯跡」に該当することから、令和6年10月1日付けで文化財保護法第94条第1項に基づく通知がなされたため、事前に遺構の分布及び深度を確認する調査を行うことになった。令和6年10月25日、11月1日・8日の3日間で調査を実施した。

「木野墓窯跡」は、宝ヶ池の北側、長代川右岸にあたる丘陵の南斜面に立地する。7世紀第三四半期頃に操業された瓦陶兼業窯とされ、北白川廃寺に瓦を供給していたことで知られる。昭和5年(1930)に木村捷三郎によってその存在が確認され、昭和35年(1960)には電気探査が行われたとされるが、結果が公表されておらず詳細は明らかになっていない¹⁾。その後、京都大学考古学

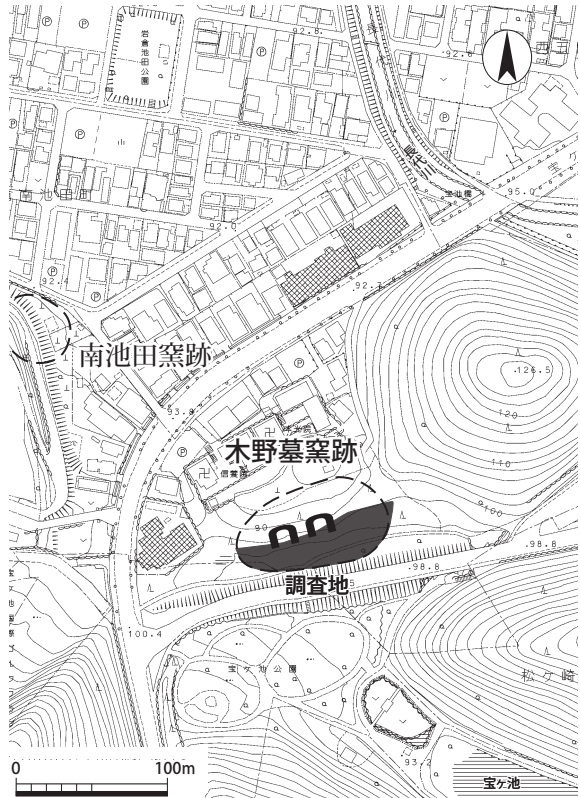


図30 調査位置図 (1:5,000)

研究会によって、昭和54年(1979)から昭和60年(1985)にかけて遺物採集や測量などが行われている。その結果、遺物の散布が2箇所に集中することや、灰原と思われる黒灰土がみられたことから、2基の窯跡があると推定された。また、窯は丘陵頂部にあたる墓地の位置にあったと考えられている²⁾。同研究会は令和4年(2022)にも踏査を行い、多数の遺物が散布することを確認し、須恵器や瓦などを採集している³⁾。また京都市文化財保護課は、平成30年の台風による倒木や土砂流出などの被害により須恵器片や瓦片が広範囲にわたって露出・散乱している状況を確認したため、遺物の散逸を懸念して令和元年から4年にかけて踏査を実施し、須恵器や瓦などを採集した⁴⁾。

2. 遺構 (図31～34)

調査地は、北から南に向かって傾斜する丘陵斜面下方から裾部にあたり、南側が一段高くなり遊歩道に至る。窯跡及び灰原が想定される範囲を中心に、調査区を東西方向及び南北方向に8箇所設けた。この結果、地表面に多量の遺物が散布していること、2～7区及び遺跡範囲外の8区にかけて灰原が広がることを確認した。確認した遺構の特徴ごとに1区・2～4区・5～7区・

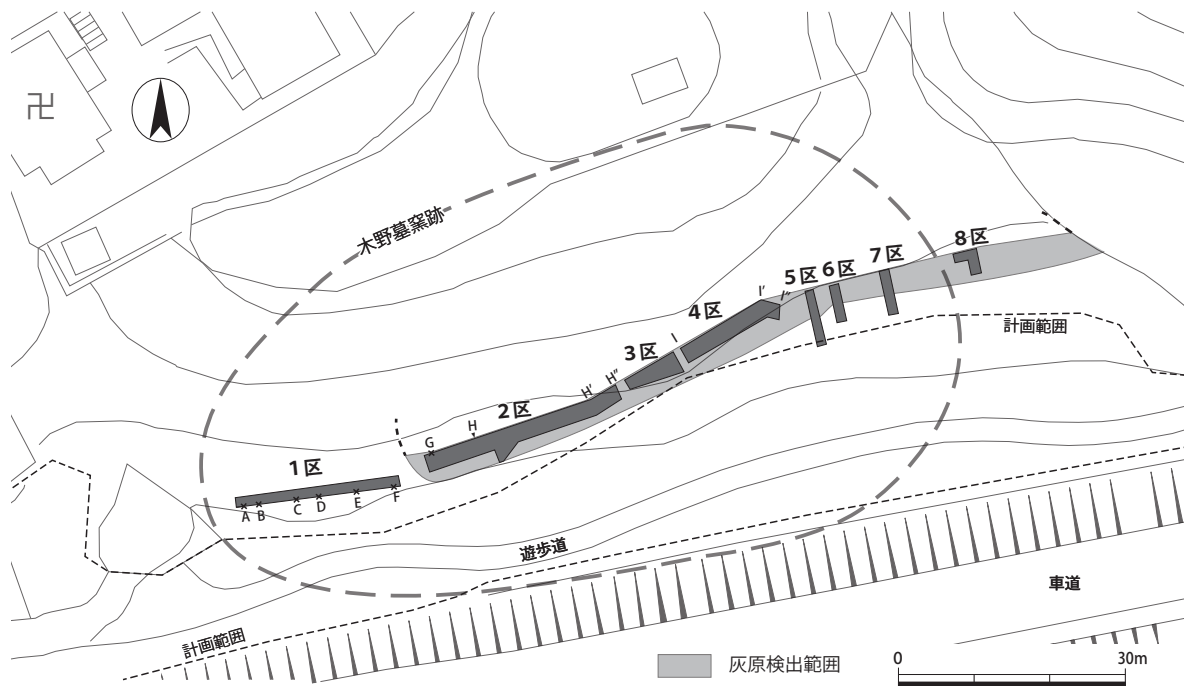


図31 調査区配置図及び灰原検出範囲（1：1,000）

8区に分けて報告する。なお、遺構確認のための調査であることから、掘削は最小限に留めている。

1区 遺跡範囲の西端に位置し、東西方向に掘削を行った。地表面の標高は95.8～96.3 mである。基本層序は、表土以下GL-0.1～-0.3 mで明黄褐色粘質土～シルトの地山となる。地山上面でピット1基を検出したが、窯跡に関する遺構・遺物は確認できなかった。

2～4区 東西方向に掘削を行った。地表面の標高は96.3～96.8 mで、西から東に向かって緩やかに傾斜する。基本層序は、表土以下GL-0.1～-0.2 mで黒褐色泥砂やにぶい黄色泥砂などの灰や須恵器・瓦を多量に含む灰原、-0.55 mでにぶい黄橙色泥土の無遺物層、-0.8 mで浅黄色粘土の地山となる。灰を含まないにぶい黄色泥砂などの黄色土と、灰を含む黒褐色泥砂などの黒色土が混在している状況がみられたが、遺物の時期差もほとんどないことから灰原の一部と考えられる。断割りを数箇所行い灰原が厚さ0.2～1.0 m堆積していることを確認し、南に向かって薄くなることがわかった。2区においては調査区から4 m南側まで灰原が広がることを確認した。また、調査区北側の表土直上に須恵器・瓦が散布している状況もみられた。

5～7区 灰原の広がりを確認するため、南北方向に掘削を行った。地表面の標高は北側が96.2～96.5 m、南側が約95.6 mで、北から南に向かって傾斜する。基本層序は、表土以下GL-0.1 mでにぶい黄褐色泥土の須



図32 2区灰原検出状況（部分）（南西から）

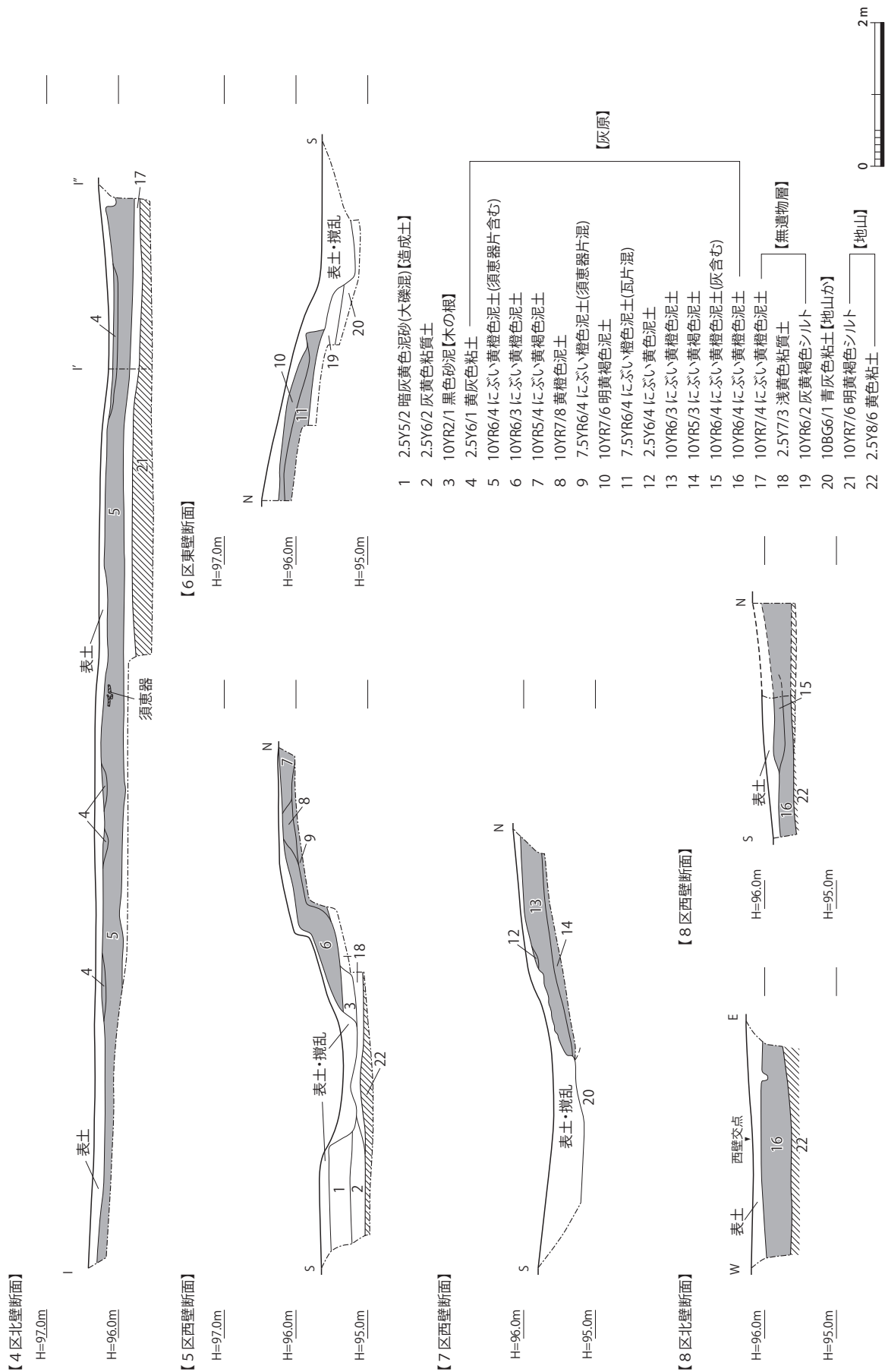


図34 4～8区断面図 (1:80)

恵器・瓦を少量含む灰原、-0.55 mで黄色粘土の地山となる。遺物を含むにぶい黄褐色泥土などの黄色土は、2～4区で確認した遺物を含む黄色土と様相が似ていることから灰原の一部と考えられる。丘陵裾部まで灰原が広がり、それより南側は遊歩道を造る際の造成に伴う盛土であることを確認した。

8区 東側への灰原の広がりを確認するため、L字状に掘削を行った。地表面の標高は約96.2 mである。基本層序は、表土以下GL-0.15 mでにぶい黄橙色泥土の灰や瓦を少量含む灰原、-0.55 mで黄色粘土の地山となる。

3. 遺物（図35～38、表3・4）

遺構・遺物は保存される方針であったため、散逸しそうな破片に限って採取し、828片を得た。採取した試料828片の内訳は、須恵器722片(87.2%)、土師器17片(2.05%)、瓦類72片(8.7%)、その他(窯壁片など)17片(2.05%)である。須恵器が全体の9割弱を占める。なお、調査区および灰原の広がり毎に仮の番号をつけて破片数を数えたが、地点毎の出土状況に大きな違いがなかったため、図化できた須恵器(1～34)及び瓦類(瓦1～6)を中心に一括して報告する。

須恵器の器形別内訳は、杯類371片(51.4%)、壺・鉢類74片(10.2%)、甕277片(38.4%)である(表3)。須恵器の杯類には杯蓋、杯G、杯Bがある。

1～34は須恵器である。1～11は杯蓋である。2～11は口径10.0～16.8 cm、高さ3.0～3.9 cm。かえりを持ち、つまみを有する。7にはヘラ記号が施されている。12～17は杯Gである。13～16は口径9.9～11.0 cm、高さ3.1～4.0 cm。16にはヘラ記号が施されている。18～21は杯Bである。18は口径13.6 cm、高さ4.6 cm、底径7.6 cm。19～21は底径7.7～8.4 cmである。22～24は壺で、22が頸部、23・24が底部である。25は鉢の口縁部、26はすり鉢の底部である。27・28は壺か鉢の底部で、糸切痕が残る。29～32は甕の口縁部で、32は口径が40 cmを超える大型のものである。33は杯蓋に重なって壺底部が溶着する。杯蓋にはヘラ記号が施されている。蓋は内面が上を向いており、焼台として使用したと考えられる。34は底部に杯蓋の一部が溶着する。底部にはヘラ記号が施されている。1～11・13・15～18・20～25・27～32は灰原から出土、12・14・19・26・33・34は表採。

図化できたものは限られているが、7世紀後半の代表的な器形の種類は概ね生産していたと推測される。また、破片数の比較から大甕を一定量焼いていたと考えられる。

瓦類には軒丸瓦・丸瓦・平瓦・鴟尾がある(表4)。全体的に小片が多く個体数は明らかにでき

表3 須恵器破片数

種類	破片数	割合
杯類	371	51.4%
壺・鉢類	74	10.2%
甕	277	38.4%
合計	722	100.0%



図35 ヘラ記号のある須恵器

表4 瓦類破片数

種類	破片数	割合
軒丸瓦	1	1.4%
丸瓦	2	2.8%
平瓦	37	51.4%
鴟尾	11	15.3%
不明	21	29.1%
合計	72	100.0%

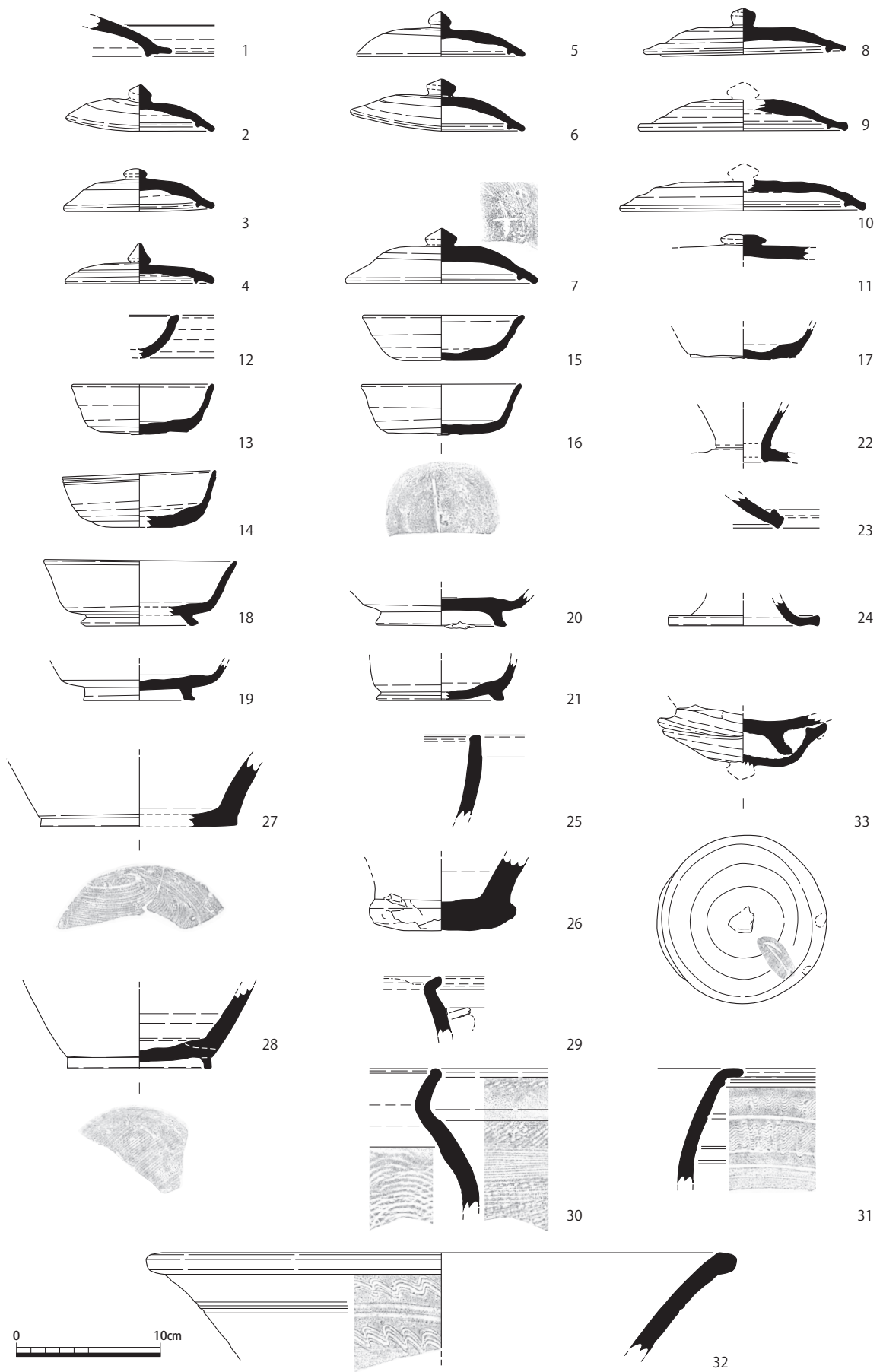


図36 土器実測図及び拓影（1：4）

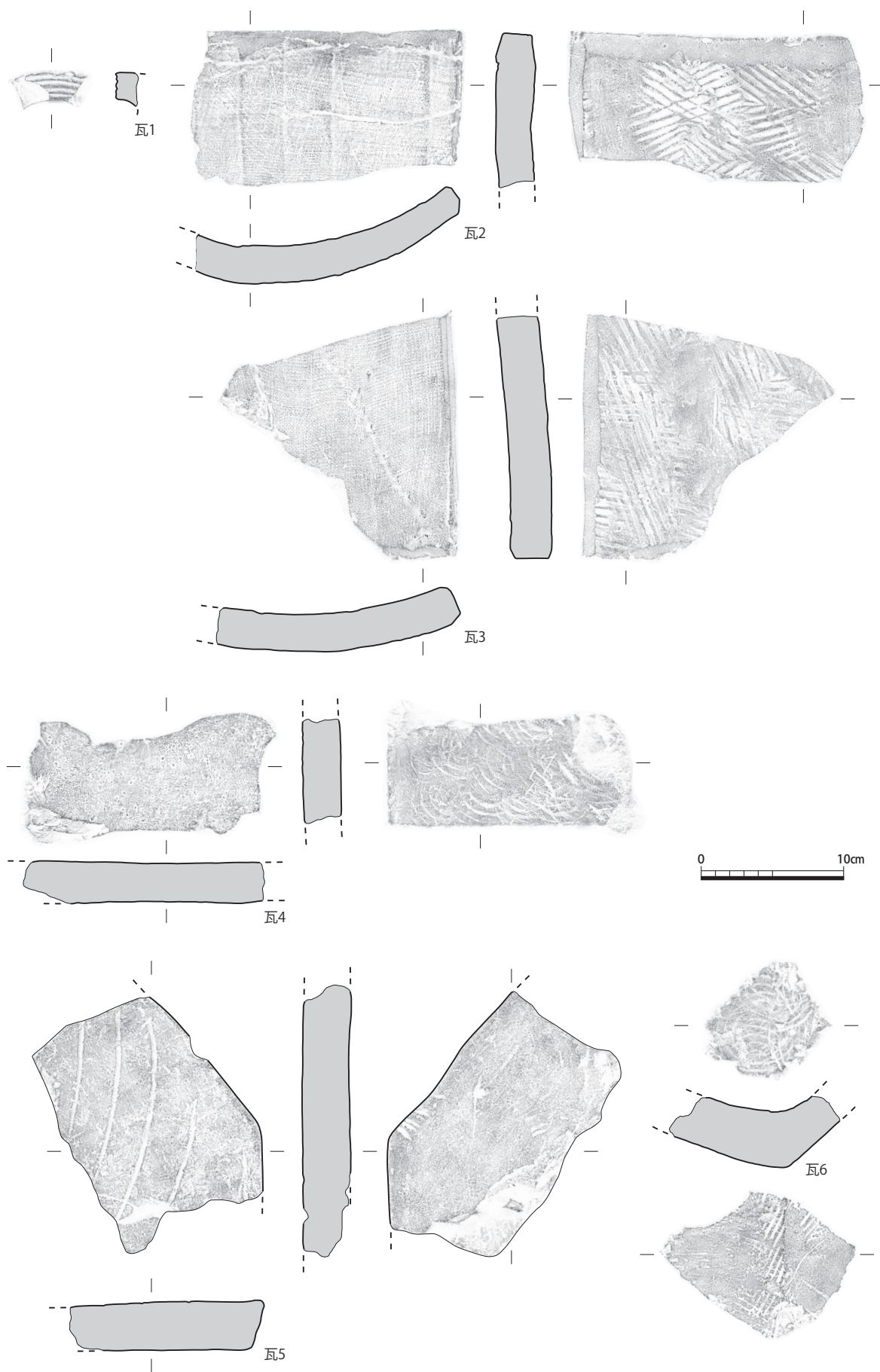


図37 瓦類実測図及び拓影（1：4）

なかったが、内訳は軒丸瓦が1点(1.4%)、丸瓦が2点(2.8%)、平瓦が37点(51.4%)、鴟尾が11点(15.3%)、不明が21点(29.1%)である。平瓦が約半数を占め、軒丸瓦及び丸瓦の出土点数が極端に少ない。また、鴟尾はこれまでの調査においても一定量が採取されており、木野墓窯跡で鴟尾生産が行われていたと考えられる。

瓦1は軒丸瓦の周縁部分である。周縁に三重圈線が巡る。調整は細片であることから不明。瓦2・3は平瓦である。瓦2の凹面には布目と梓板圧痕、凸面は斜格子を刻んだ叩き板の痕跡(叩き)がある。調整は凹面側面際ナデ、広端面際ナデ、凸面広端面際ケズリ、広端面ケズリを施す。瓦3の凹面には布目、凸面は斜格子を刻んだ叩き板の痕跡がある。調整は凹面側面際ケズリ、凸面側面際ケズリ、狭端面ケズリを施す。瓦4～6は鴟尾である。瓦4は胴部である。外面はナデ、内面は同心円を刻んだ工具による叩きを施す。瓦5は左鰭部である。外面に円弧状の線を刻む。調整は外面が縦ケズリ、内面はナデを施す。瓦6は脊稜部から頂部にかけてである。調整は外面叩き、内面は同心円を刻んだ工具による叩きもしくは押さえを施す。瓦1～5は灰原から出土、瓦6は表採。



35

図38 窯壁片

また、土師器には土師器皿などの細片、その他には窯壁片(35)とみられるスサ入りの焼土塊が確認できた。

4. まとめ(図31)

今回の調査では、2～8区の丘陵斜面下方から裾部にかけて灰や須恵器・瓦を含む灰原が広がっていることを確認した。灰原から出土・表採された須恵器は7世紀後半とみられ、これまでの調査で確認された遺物と同時期であることがわかった。遺物が多量に出土した2～4区で窯壁片を確認し、付近に窯跡があった可能性が高くなった。また、その東側及び遺跡範囲外においても灰原が続くことから、これまでに想定されている2基の窯跡以外にも窯があったと考えられる。

事前協議の通り、今回の計画では遺跡の保存が図られることになった。なお、今回の調査地北側及び東側においても遺構・遺物が残っている可能性があり、注意が必要である。

(八軒かほり)

註

- 1)『岩倉古窯跡群』、京都大学考古学研究会、1992年。
- 2)1と同じ。
- 3)「第2章 岩倉古窯跡群」『第58 とれんち』、京都大学考古学研究会、2023年。
- 4)「Ⅲ-2 木野墓窯跡(19A002)」『京都市内遺跡詳細分布調査報告 令和4年度』、京都市文化市民局、2020年。

Ⅲ-5 鳥羽離宮跡、鳥羽遺跡 No.114 (24T235)

1. 調査の経緯 (図39・40)

本件は事務所新築工事に伴う試掘調査である。伏見区竹田真幡木町に位置し、周知の埋蔵文化財包蔵地である鳥羽離宮跡・鳥羽遺跡に該当する。

令和6年9月18日に試掘調査を実施し、湿地状堆積から鳥羽離宮期の遺物が多数出土したことから、遺物の回収を目的として9月30日・10月1日に追加調査を実施した。計4か所の調査区を設け調査面積は計45㎡である。

鳥羽離宮は11世紀末に藤原季綱が白河天皇に献上した鳥羽山荘を始めとして、13世紀中頃まで代々院御所として使用されてきた。離宮内には南殿・北殿・馬場殿・泉殿・東殿・田中殿などの御所と御堂が造営され、その周辺には池を中心とした庭園が営まれた。今回の調査地は東殿の北側に位置しており、雑舎群が推定されている場所である。

周辺調査では、調査①で中世の整地層や鳥羽離宮期の堀状遺構などが確認されている¹⁾。調査②では、中世のピットや土坑などの遺構が展開し遺物が出土している²⁾。調査③では、中世の柱穴と湿地状堆積、及び中世から近世にかけての耕作に伴う整地層が確認されている³⁾。調査④では、室町時代の南北溝、鎌倉時代の土坑などが複数確認されている⁴⁾。

一方、調査⑤では、鳥羽離宮期の遺物包含層を確認しているが、顕著な遺構は確認されていない⁵⁾。調査⑥では、近世以降の遺物や湿地状堆積を⁶⁾、調査⑦では、鳥羽離宮造営以前の低湿地や同時期の遺物包含層が確認されており⁷⁾、調査⑧では、湿地状堆積の中から鎌倉時代と考えられる遺物が出土



図39 調査位置図 (1 : 5,000)

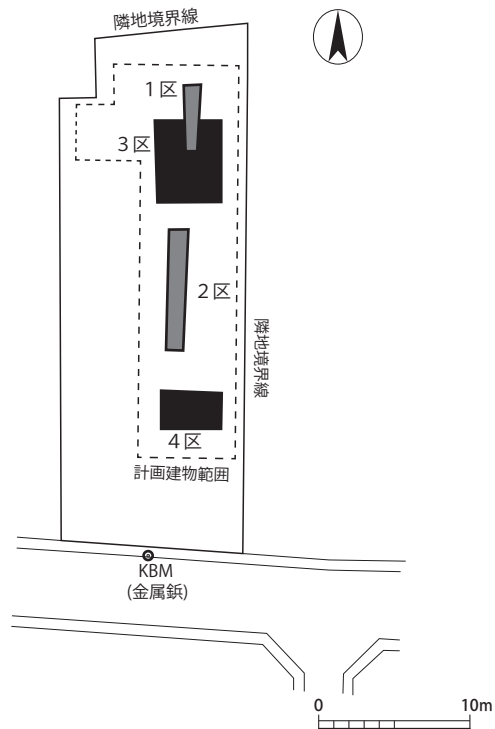
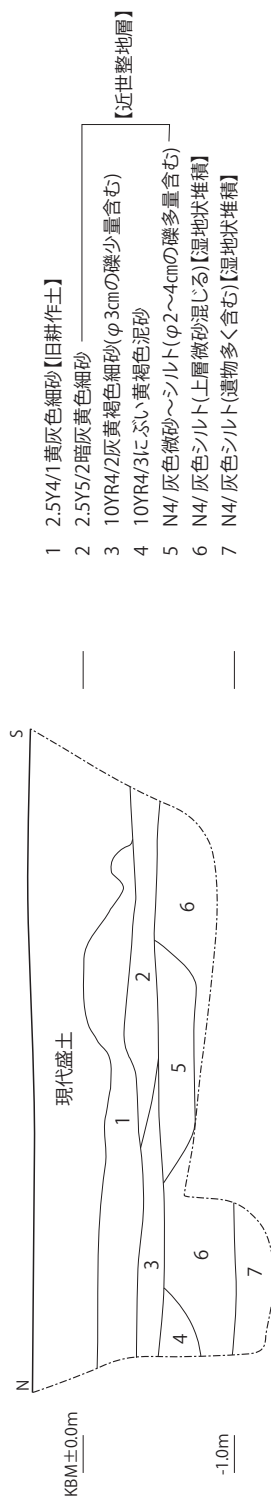


図40 調査区配置図 (1 : 500)

1区東壁



2区東壁

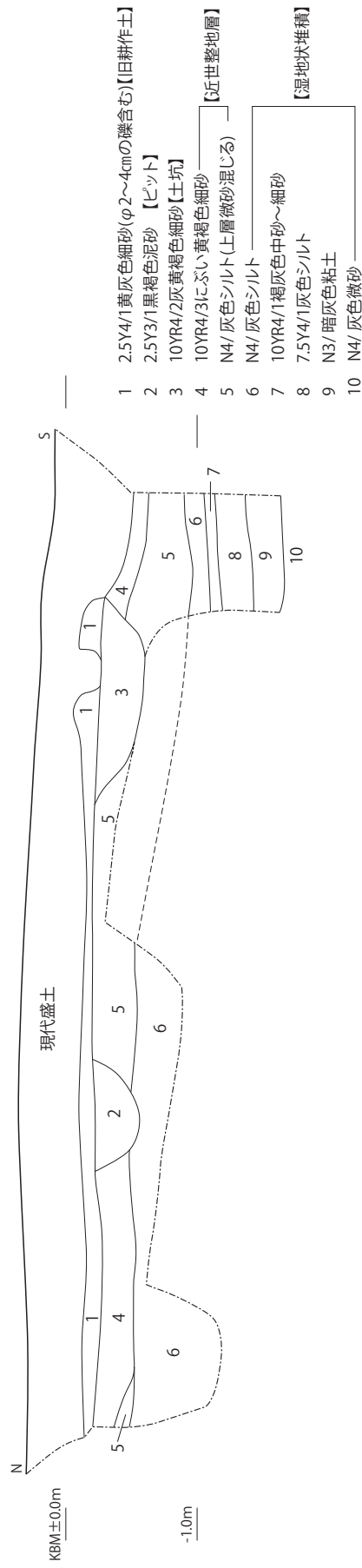


図41 1・2区断面図 (1:50)

している⁸⁾。また調査⑨でも、湿地状堆積から鳥羽離宮期の遺物が出土している⁹⁾。調査⑩では、自然の落込みと湿地状堆積の確認にとどまるものの、12世紀後半の遺物が出土している¹⁰⁾。

以上のように調査①～④では主に中世～近世までの遺構が確認されている。調査⑤～⑩にかけては顕著な遺構は確認されず、湿地状堆積の確認にとどまる状況である。ただし、そのうち調査⑦～⑩からは鳥羽離宮期の遺物が確認されている。

2. 遺構（図41～43）

各調査で基本的な層序は共通しており、1区東壁で層序を説明する。GL-0.3 mで黄灰色細砂の旧耕作土（図41- 1層）、-0.7 mで灰黄褐色細砂（φ3 cmの礫含む）の近世整地層（同3層）、-0.85 mで微砂混じる灰色シルトの近世整地層（同6層）、-1.5 mで遺物を多く含む灰色シルトの湿地状堆積（同7層）となる。

1・2区 灰色シルト上面（同6層）で遺構検出したところ、顕著な遺構の確認には至らなかったが、層中から鎌倉時代～室町時代の土師器や瓦器碗などが出土した。

3区 灰色シルト上面（図42- 8層）で遺構検出をしたところ、顕著な遺構の確認には至らなかった。東壁断面で見ると8層が北へ向かって1段下っていることを確認した。8層からは遺物が多量に出土した。本調査地で最も多く遺物が出土した。

4区 灰色シルト（微砂混）（図43- 7層）上面で遺構検出をしたところ、時期不明のピットを3基確認した。いずれのピットも径0.2～0.3 mほどで遺物は確認できなかった。調査区の東面を

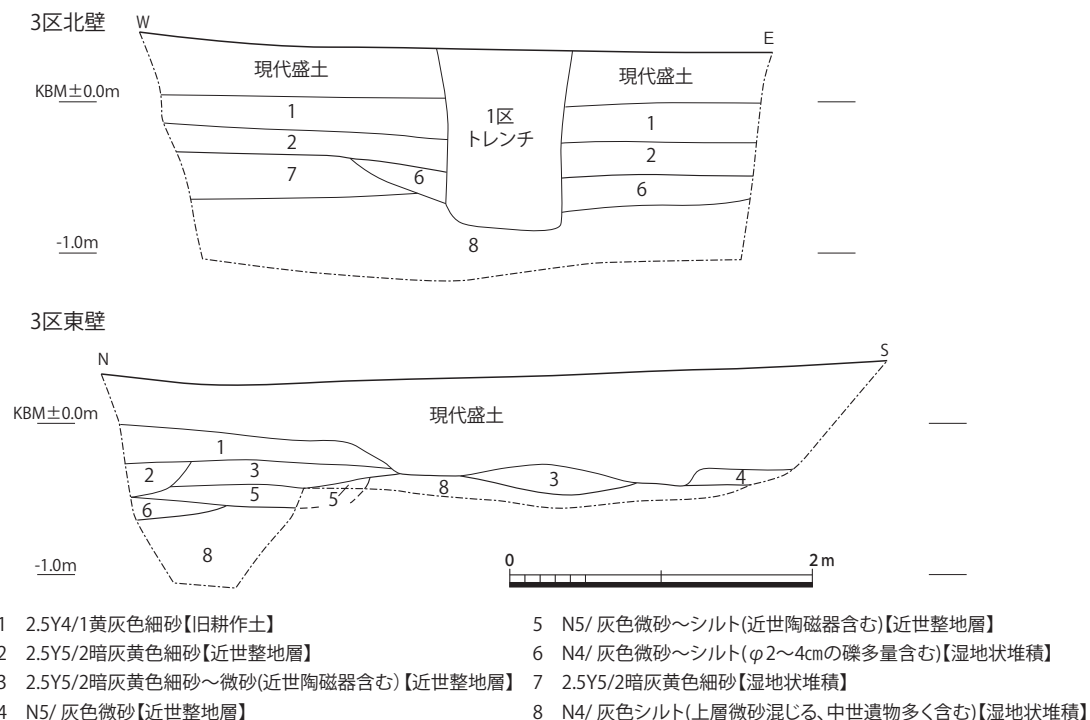


図42 3区北・東壁断面図（1：50）

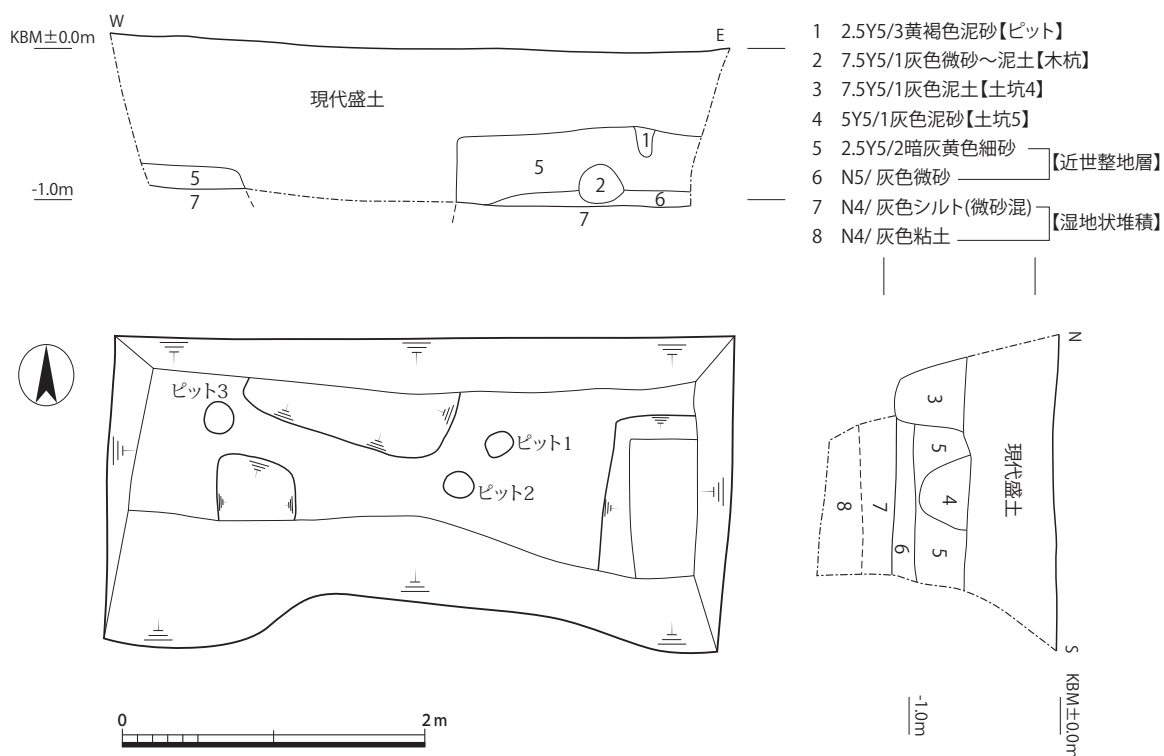


図43 4区平・断面図（1：50）

断ち割って下層の確認を行ったところ、1～3区の調査成果同様、湿地状堆積（同7層）から室町時代の遺物が少量出土した。

3. 遺物（図44）

出土遺物は土師器、白磁、瓦器碗、軒丸瓦、漆器碗などである。1～22は3区8層、23は4区土坑5から出土した。

1～13は土師器の皿Nである。口径は1～3が8.8～10.0cm、4～8は14.0～14.6cmである。時期は5B～6Aに収まる。14～17・23は瓦器碗で、18・19は瓦器皿である。15・17は断面三角形の高台を取り付ける。また15は外面上部にヘラミガキを施し、下部にはユビオサエ痕が残る。16は外面上部にヘラミガキを施し、下部にはユビオサエ痕が残る。17は外面上部と内面にヘラミガキを施す。18は内面に暗文を施す。19は内面に暗文、内面上部にはヘラミガキを施す。23は内面にヘラミガキ、外面にもヘラミガキがわずかに残る。20は白磁の皿である。21は漆器碗である。外面に3つの赤い花文、内面に外面と同じ花文を施す。中央に0.7cmほどの穿孔の痕跡が見られる。22は三つ巴の軒丸瓦である。小ぶりの珠文で、裏面は縦方向のナデで調整する。時期は平安後期～鎌倉時代のものと考えられる。

4. まとめ

今回の調査では、鳥羽離宮期の遺構は確認できなかったものの、近世以降の整地層を確認し、湿地状堆積から鳥羽離宮期の遺物が多数出土した。周辺の調査において中世の遺構が広がっている

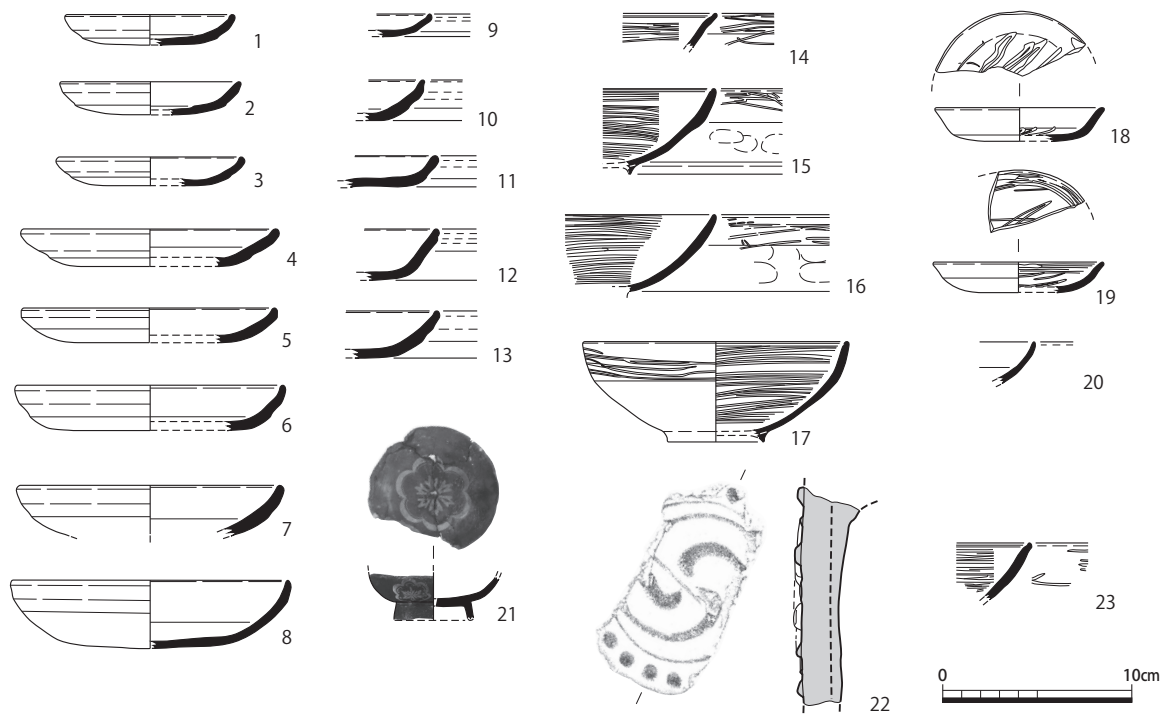


図44 出土遺物実測図（1：4）

地点もあるが、調査地の北側から東側にかけては湿地状堆積が広がる範囲であり、遺物が確認されている。今回の調査においても同様の成果を得ることができた。湿地状堆積についても注視する必要がある。

（清水早織）

註

- 1) 「Ⅲ 第124次調査」『鳥羽離宮跡文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要』京都市文化市民局、昭和62年度、1988年。
- 2) 『京都市内遺跡試掘調査報告 平成18年度』一覧表、京都市文化市民局、2007年。
- 3) 『京都市内遺跡試掘調査報告 平成11年度』一覧表、京都市文化市民局、2000年。
- 4) 『京都市内遺跡試掘調査報告 平成22年度』一覧表、京都市文化市民局、2011年。
- 5) 「第66次発掘調査」『鳥羽離宮跡文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要』京都市文化観光局、昭和55年度、1980年。
- 6) 『京都市内遺跡試掘調査報告 平成8年度』一覧表、京都市文化市民局、1997年。
- 7) 「第52次発掘調査」『鳥羽離宮跡文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要』京都市文化観光局、昭和54年度、1980年。
- 8) 『京都市内遺跡試掘調査報告 平成10年度』一覧表、京都市文化市民局、1999年。
- 9) 『京都市内遺跡試掘調査報告 令和元年度』一覧表、京都市文化市民局、2020年。
- 10) 『京都市内遺跡試掘調査報告 令和2年度』一覧表、京都市文化市民局、2021年。

Ⅲ-6 史跡・特別名勝 西芳寺庭園 No.32 (4N080)

1. はじめに (図45・46)

本件は、史跡及び特別名勝西芳寺庭園における試掘調査である。

西芳寺の創建については、『西芳寺池庭縁起』によると、聖徳太子の別荘を天平年間(729～749)に行基が寺に改め、「西方寺」を創建したことが記されている。その後荒廃したものの、鎌倉時代に中原師員が堂舎を再興し、法然上人によって念仏宗(浄土宗)の寺院としたものを、暦応2年(1339)に師員の子孫である藤原親秀が夢窓国師を勧請し、名を「西芳寺」として禅宗に改め中興したとある。

無窓国師によって手を加えられた庭園は、当時から名園として名高く、国師に帰依した足利



図45 調査位置図 (1:5,000)

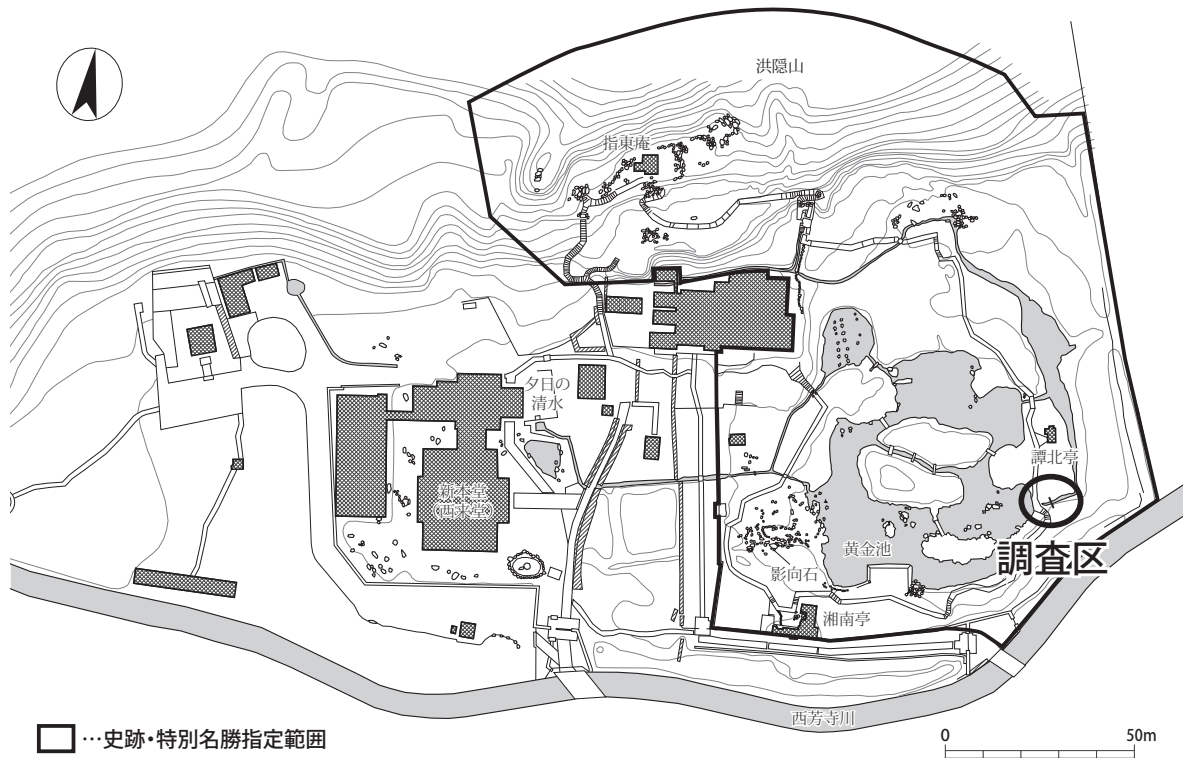


図46 調査区配置図 (1:2,000)

尊氏・直義兄弟を始め、歴代の足利将軍がここを訪れ、8代将軍義政は東山殿（銀閣寺）の造営にあたり、範を西芳寺に求めたことで知られている。

しかし応仁・文明の乱の際に焼き討ちを受け、境内建物はほぼ全焼したことに加え、狭隘な谷間の扇状地上に立地する特性から、度重なる山崩れと洪水によって荒廃したことが知られ、享保19年（1734）発行の『山州志』には「近世山潰れ水溢れ半ば荒廃す」と記されている。現在、西芳寺は境内は一面苔に覆われ、「苔寺」の名で知られているが、これは荒廃した後の江戸時代後期以降の姿である。



図47 水路跡の凹みと黄金池（東から）

現在、園池（黄金池）は、境内西側の「夕日の清水」からの湧水に西芳寺川から汲み上げた水を合わせた導水路から水を引き、譚北亭北側の黄金池東端の一角から境外に排水している（図46）。そのため、池内には水流の滞る場所が生じ、夏場には藻が繁殖するため、名勝庭園の景観に影響を及ぼす事態となっている。この状況に対し西芳寺では、水流の滞留箇所を減らし、水質を改善することを目的に、現在も凹みとして残るかつての排水路を復元することを計画された（図47）。

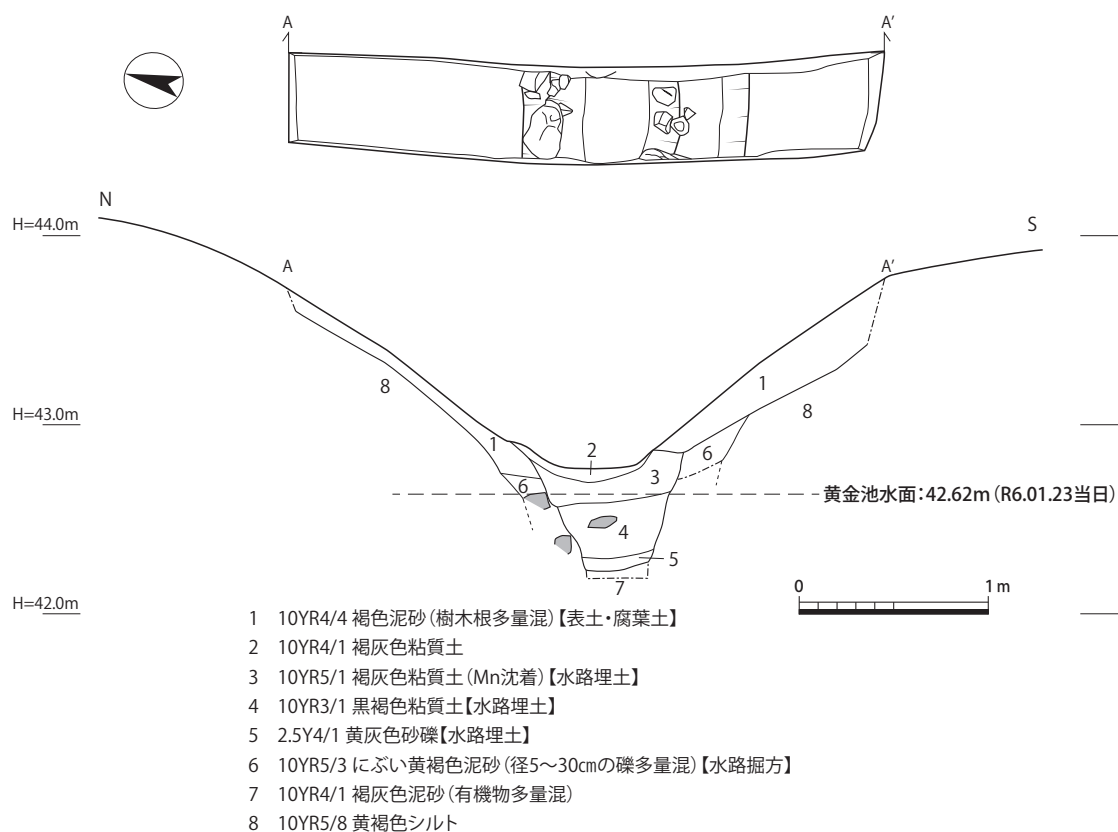


図48 調査区平・断面図（1：40）



図49 水路跡完掘状況（西から）

水路跡の復元にあたっては、黄金池の水面レベル（H=42.62 m：令和6年1月23日現在）に合わせて堆積土の掘削を行うため、地下遺構の保護を目的に、事前に試掘調査を実施することとなった。調査は、令和6年1月22・23日に実施した。調査面積は2㎡である。

2. 遺構（図47～49）

調査区は、樹木の影響が少ない箇所ので凹みに直交するように設定し（図46）、掘削を行った。

水路跡 表土直下で現在の庭園の基盤層となる黄褐色シルトとなる。シルト上面にて水路跡の埋土を確認した。水路跡は、幅0.8 m、深さ0.65 mを測り、断面形状は逆台形を呈する。埋土は3層に分かれ、上・中層は水分を多く含む粘質土、最下層は砂礫が堆積している。水路の掘方は、幅1.3 mを測る。水路肩口にあたる場所には人頭大の河原石が点在し、護岸状を呈するが、丁寧に組み上げられたものではない。

埋土及び掘方から遺物は出土しなかったため、構築時期等の手がかりは得られなかった。

3. まとめ（図50）

今回の調査で、現在も地表面に痕跡として残る凹みについて、最下層に水流があった痕跡を示す砂礫が堆積していること、肩口にあたる場所に護岸状に河原石が埋め込まれていることから、水路として構築されたことを確認した。遺物が出土せず、成立時期や埋没時期を明確にすることは出来なかったため、絵図や資料等から検討を行い、まとめとしたい。

応仁・文明の乱以前の庭園の姿を記した資料に、李氏朝鮮の使節の一員として嘉吉3年（1443）に西芳寺を訪れた申叔舟が記した『日本栖芳寺遇真記』がある。ここには庭園の排水について、「湘

南亭は池の心に居りて南辺に近し。亭の南に其堤を缺きて以て池水を泄して其悪を流す」とある。現在、境内に残る湘南亭は安土桃山時代に建築された茶室のため、記載の湘南亭とは異なるが、かつての湘南亭は、池中南辺の小島に建ち、その南の堤から西芳寺川に水を落としていたことが窺え、現在とは排水の場所が異なることがわかる。絵画資料では、天文14年(1545)頃とされる太田記念美術館所蔵の「洛外名所図屏風」に庭園が描かれているが、排水については判然としない。江戸時代後半(天保12年(1841))の『西芳寺放生會重興略記』には、現在の庭園に近い景観が描かれており、譚北亭北側の現在と同じ位置から排水を行っていることがわかる。

今回の調査で確認された水路については、明治44年(1911)に刊行された『日本名園図譜』に描かれているほか¹⁾、大正11年(1922)に測量された『指定庭園調査報告』(1928年刊行)においても確認できる²⁾。

上記を踏まえると、確認した水路は、遅くとも明治時代には開削されていたことは確実といえる。また、近年境内で進めている保存修理に伴う確認調査等において、黄金池西側の現在の景観は、江戸時代に大規模な造成によって形成されたことが明らかとなりつつある³⁾。したがって確認した水路も、江戸時代に西芳寺の庭園が再整備された際に開削された可能性も考えられよう。

(西森正晃)



図50 調査区から黄金池を望む(東から)

註

1) 本多綿吉郎『日本名園図譜』、1911年。

2) 『指定庭園調査報告 第1輯』京都府、1928年。

3) 「史跡・特別名勝西芳寺庭園」『京都市内遺跡試掘調査報告 令和3年度』京都市文化市民局、2022年。

「史跡・特別名勝西芳寺庭園」『京都市内遺跡試掘調査報告 令和4年度』京都市文化市民局、2023年。

のほか、史跡・特別名勝西芳寺庭園保存整備事業(令和5～7年度)に伴う確認調査成果による。

Ⅲ-7 下津林遺跡 No123 (24S128)

1. 調査にいたる経緯と経過 (図51・52)

調査地は、京都市西京区下津林佃に位置する。西に京都府立桂高校、南に陸上自衛隊桂駐屯地が立地しており、弥生時代後期～古墳時代の遺物散布地として知られる下津林遺跡の南半部に相当する (図 51)。対象地の現況は、東半部が旧来の水田、西半部は盛土の上に木造アパートが建つ。今回、この水田とアパート用地をあわせた区画において宅地造成が計画されたため、試掘調査を実施した。

試掘調査は令和6年6月25日に実施した。調査区は当初、対象地内を南北に通る専用道路の中央に設定する予定であったが、既設擁壁への影響を考慮して、やや東に寄せた位置へと変更した (図 52- 1区)。調査の結果、GL-0.15 mという非常に浅い深度において、弥生時代後期の溝やピットを伴う遺構面を確認した。このため事業者と協議を行い、工事掘削深度が遺構面に抵触しないよう設計変更を行うことにより遺構面の保存を図ることとなった。ただし新設埋設管と既存管との接合部分については深く掘削する必要があることから、工事施工前に改めて追加調査を実施することとした。

追加調査は、令和6年9月12・13日の2日間にわたり実施した。上記の協議結果に基づき調査区を設定したところ (図 52- 2区・3区)、並行して現地で行われていた準備工 (既設擁壁撤去

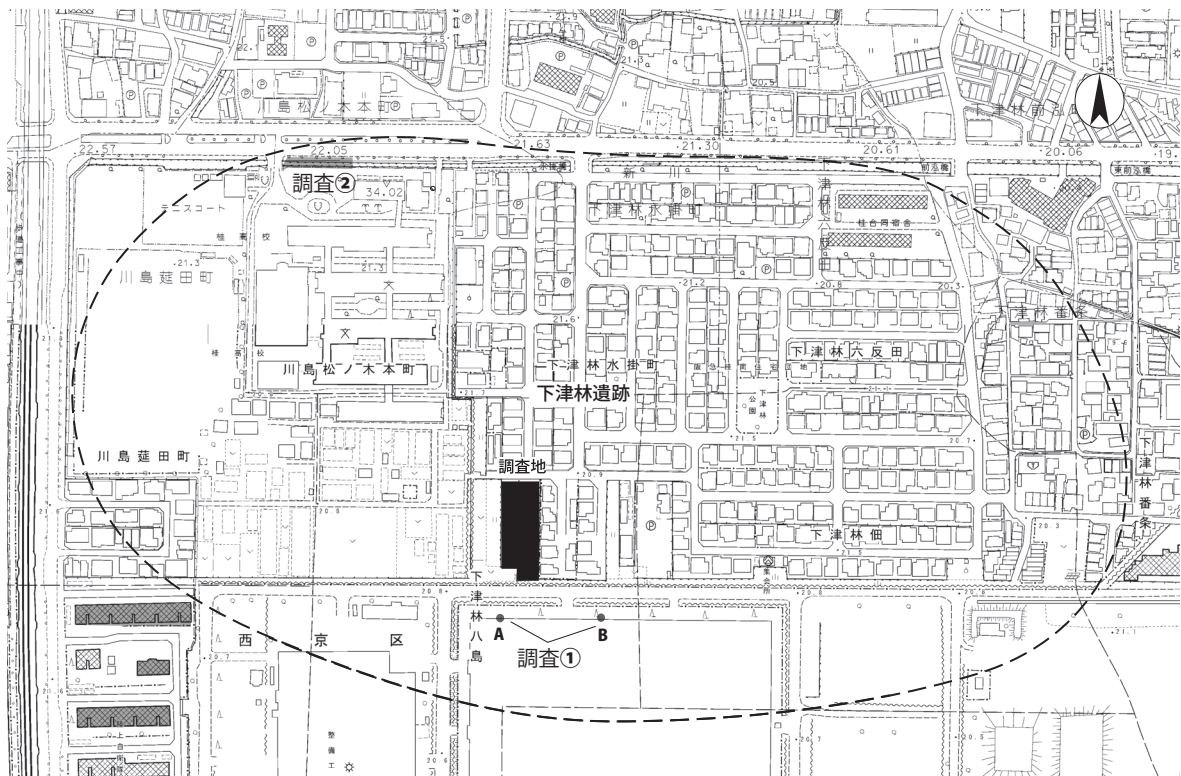


図51 調査位置図 (1 : 5,000)

のための確認掘削と盛土敷設のための除草作業)においても遺構面の露出が確認されたため、急遽調査区を追加して記録保存を実施した(図52-4・5区)。

以上の経緯により、調査期間は計3日間、掘削面積は130㎡となった。

2. 周辺調査(図51)

調査地の南では、平成3年度に駐屯地内で給水管新設工事に伴う立会調査が行われ、弥生時代中期後半の遺構が発見された(調査①)^{註1)}。検出レベルはGL-0.3～-0.4mで、盛土及び旧耕作土の直下が遺構面となる。このうちA地点では、幅1.9m、深さ0.5mを測る土坑が確認され、埋土から多量の炭化物と弥生土器の破片が出土した。またB地点では、幅1.0m、深さ0.3mを測る土坑から、弥生時代中期後半の弥生土器壺、甕の破片がまとまって出土した。

調査地の北方では、桂高校の北側を流れる水路の改修工事において令和4年度に詳細分布調査が行われており、GL-0.2mで固く締まる灰オリーブ極細砂～細砂の弥生時代包含層、-0.52mで明黄褐色シルトの地山が確認されている(調査②)²⁾。

以上の成果から、今回の調査地においても弥生時代に遡る遺構の発見が予測された。

3. 調査成果(図53～58)

(1) 1区

現代耕作土の除去面であるGL-0.15mでにぶい黄褐色細砂混じり粘土質シルトの基盤層、-0.4～-0.8mでにぶい黄褐色細砂混じり粘土質シルトの地山を確認した。基盤層上面が遺構面であり、溝、竪穴建物、ピット等の遺構を検出した(図56)。

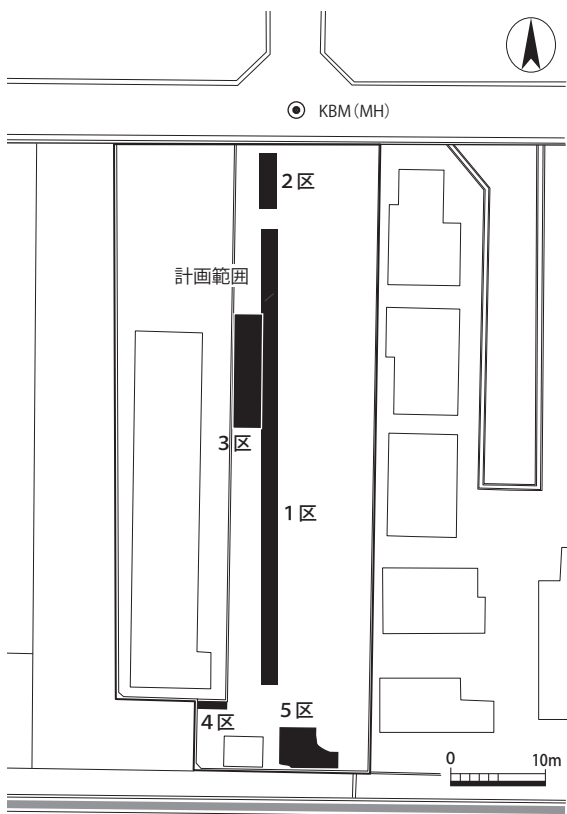


図52 調査区配置図(1:800)



図53 1区溝2検出状況(東から)



図54 1区竪穴建物101検出状況(北東から)

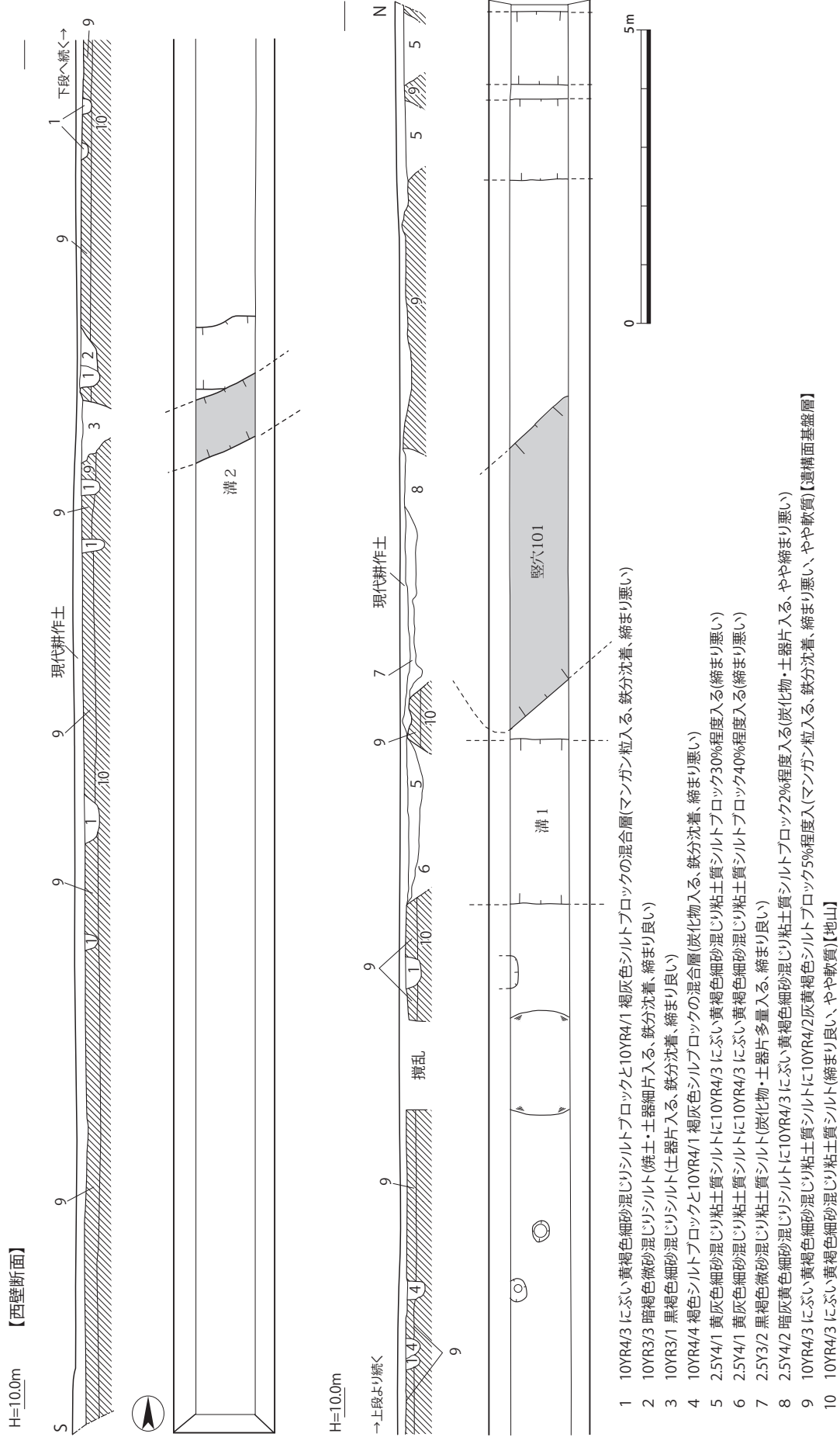


図55 1区遺構平・断面図 (1:100)

遺構には2時期あり、東西方向にのびる中世（14～15世紀）の溝と、弥生時代後期の遺構群が同一面で重なる。中世の溝は主に耕作に伴うと考えられるもので、黄灰色細砂混じりシルトを主体とする。一方、弥生時代の遺構埋土は黒褐色細砂混じりシルトを主体とし、焼土や炭化物、土器片を一定量含む。

溝1 調査区北半部において検出した東西方向の溝である。検出長1.0 m、最大幅2.9 m、深度は0.3 m以上を測る。埋土は上下に分層でき、上層が地山ブロックを含む黄灰色細砂混じり粘土質シルト、下層が地山ブロックを含む黄灰色細砂混じり粘土質シルトで、ともに締まりが悪い。埋土には瓦器碗の細片を含む。中世以降の遺構である。

溝2 調査区中央付近において検出した遺構である（図53）。北西-南東方向に主軸をもち、調査区外へと続く。検出長は1.1 m、最大幅は1.0 m、深度は0.4 m以上を測る。断面形状は逆三角形に近く、中央が深く下がる。埋土は黒褐色細砂混じりシルトを主体とする。埋土から弥生土器の壺と甕の破片が出土した。摩滅が著しく弥生土器の詳細な時期は不明である。

竪穴建物101 1区と3区の北半部において検出した遺構である（図54）。両区の接合成果から、長辺4.0 m以上、短辺3.2 m程度の長方形プランが復元できる。埋土は粘土質シルトブロックを含む暗灰黄色細砂混じりシルトで、炭化物と弥生土器片を含む。遺構内からは弥生土器甕底部（図58-3）や器台（同4）、水差形土器？（同5）の破片等が出土した。

（2）2区（図56）

1区の北に設定した調査区である。（図56上左）。1区と同様、GL-0.15 mでにぶい黄褐色細砂混じり粘土質シルトの基盤層（遺構面）を検出した。遺構面では、ピット、溝を検出した。

溝21～23 調査区北端部で検出した3条の溝である。方位西に対して15度北へ振る角度を主軸とし、並行して調査区外へと

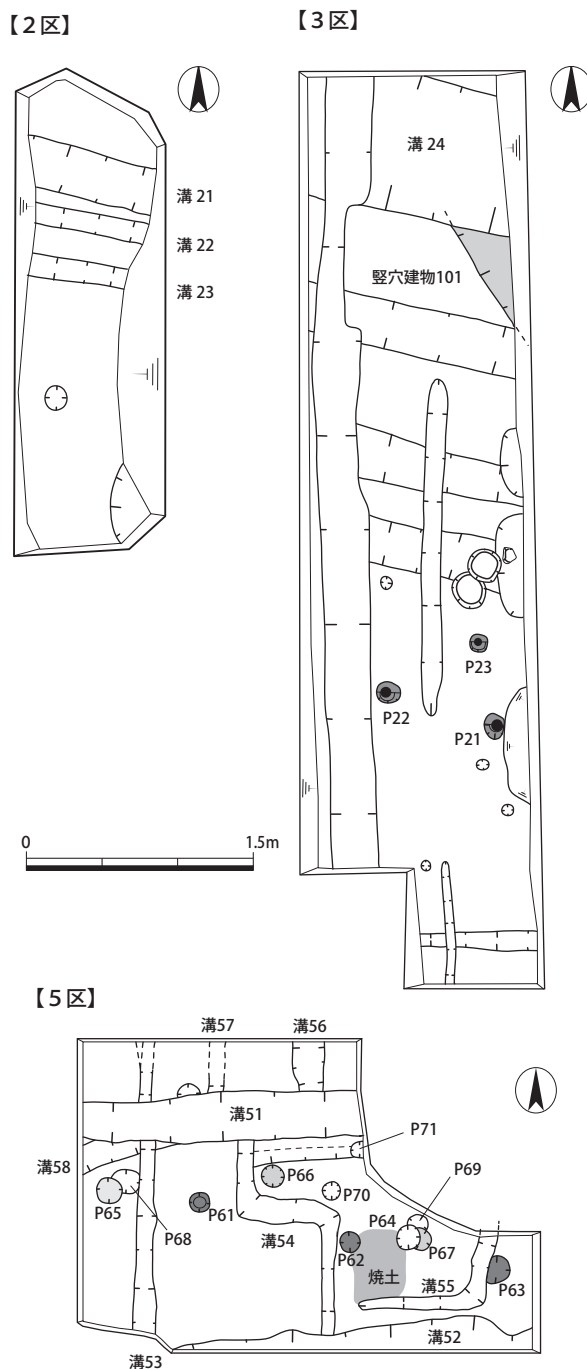


図56 2・3・5区遺構位置図（1：50）

のびる。大正元年に作成された地形図（国土交通省所蔵）には、調査区の北辺に同方向の水路が描かれており、昭和10年の京都市都市計画基本図にはこれに沿って畦道が描かれている。おそらく溝21～23は、これらの水路や畦道に則して作られた水田の耕作痕跡と推測される。埋土はいずれも暗灰黄色微砂混じりシルトを主体とする。遺物の出土は確認できなかったが、中近世の成立であろう。

（3）3区（図57）

1区北半部の西側に設定した調査区である（図56上右・図版21）。1区同様、GL-0.15mでにぶい黄褐色細砂混じり粘土質シルトの基盤層（遺構面）を検出した。遺構面では、溝、ピット、竪穴建物を検出した。ピットはいずれも柱あたりを残すが、建物の復元はできていない。なお、遺構掘削はピットの半裁のみにとどめた。

ピット21～23 調査区南半部で検出した遺構群である（図57上段）。ピット21の平面形状は長径0.34m、短径0.25mを測る不定形、断面形状は最大深度0.2mを測る不整形な碗形を呈する。掘り方の東寄りに直径0.3mの柱あたりを残す。埋土は暗灰黄色細砂混じりシルトを主体とする。

ピット22の平面形状は、長径0.34m、短径0.28mを測る楕円形、断面形状は最大深度0.21m

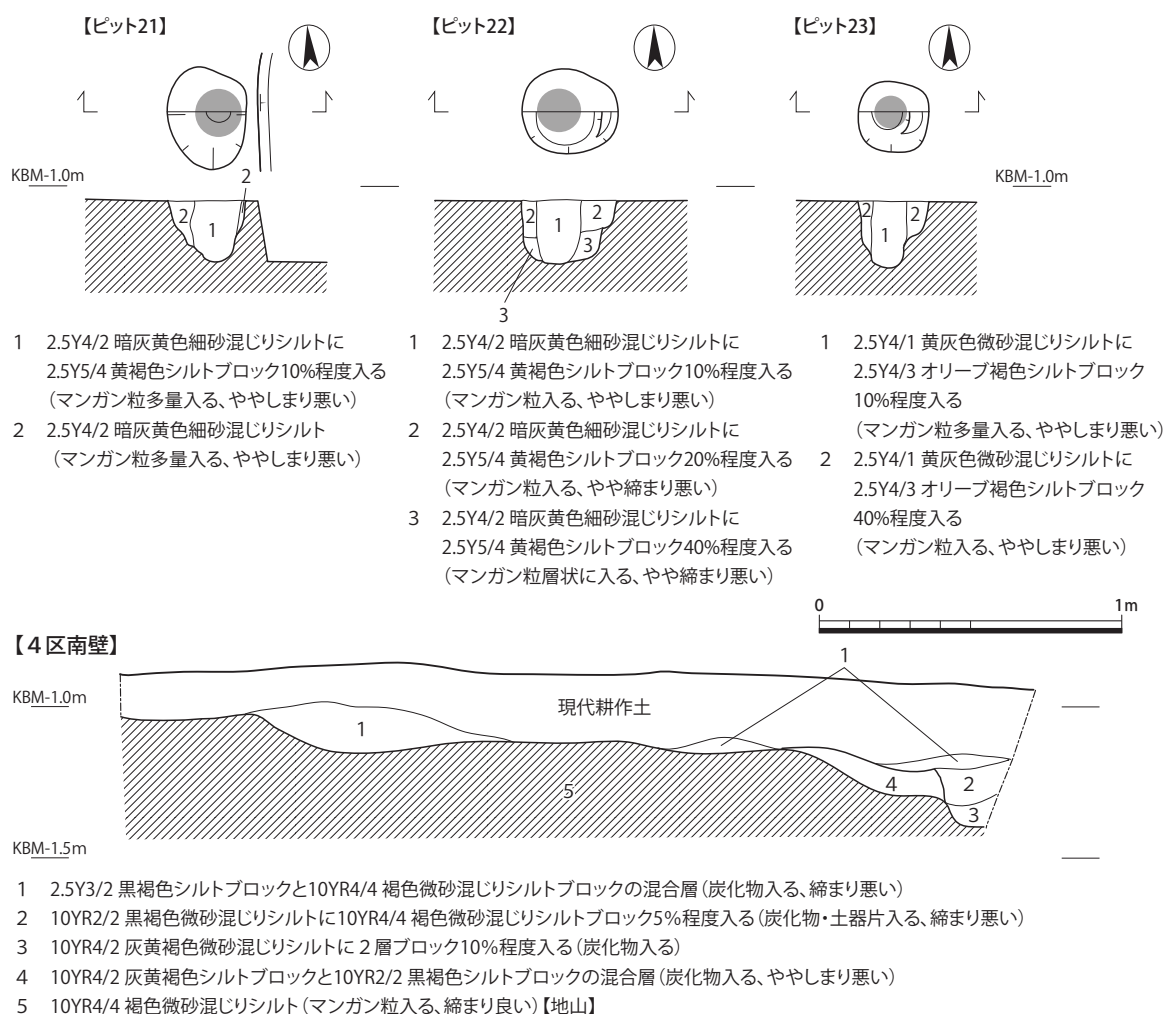


図57 4区南壁断面図・2区遺構平・断面図（1：25）

の逆凸形を呈する。掘り方の西寄りに直径 0.3 m の柱あたりを残す。埋土は暗灰黄色細砂混じりシルトを主体とする。

ピット 23 の平面形状は一辺 0.32 m を測る隅丸方形、断面形状は最大深度 0.23 m を測る逆凸形を呈する。掘り方のほぼ中央に直径 0.2 m の柱あたりを残す。埋土は暗灰黄色細砂混じりシルトを主体とする。

いずれのピットからも遺物の出土が確認できていないため成立時期は不明である。

溝 24 調査区北端で検出した遺構である。検出長 2.6 m、最大幅 1.8 m、最大深度は 0.1 m を測る。埋土は黄灰色細砂混じり粘土質シルトを主体とする。1 区では検出できていないことから、東へ向かって徐々に浅くなり、削平によって消滅するものとみられる。中世の遺構である。

(4) 4 区 (図 57)

現況のアパート用地南側で断面観察を行った。GL-0.15 m で黒褐色シルトブロックと褐色微砂混じりシルトブロックの混合層、-0.41 m で褐色微砂混じりシルトの地山に達する。調査区の西端では、遺構の掘り込みを確認した。埋土には炭化物と弥生土器片が入る。竪穴建物の一部である可能性がある。

(5) 5 区 (図 56)

対象地の南端部において平面検出を行った。地表面から遺構面までの深度は 0.08 m と、対象地内でもっとも浅い。基盤層は他調査区と同じくにぶい黄褐色細砂混じり粘土質シルトを主体とする。遺構面では溝、ピット、焼土の集積を検出した。

溝 51・52 溝 51 は、調査区北辺で検出した遺構で、検出長 3.7 m、最大幅 0.6 m を測る。ほぼ東西方向にのび、調査区外へ続く。溝 52 は調査区南辺で検出した遺構で、検出長 4.8 m、検出最大幅は 0.4 m を測る。溝 51 とは同じく東西へのびる。埋土はともに暗灰黄色微砂混じりシルトを主体とし、径 3c m 未満の礫が少量混じる。鉄分とマンガン粒が細かく沈着しており、攪拌痕跡が認められる。耕作に伴う遺構と推測される。ともに遺物は確認できなかった。

溝 53 調査区内東辺で検出した遺構で、溝 51 に切られる。検出長 3.9 m、最大幅は 0.3 m を測る。南北方向へ直線的にのび、調査区外へ続く。埋土はオリーブ褐色微砂混じりシルトを主体とする。遺物の出土は確認できていないが、土質から中世遺構の可能性が高い。遺構の性格は不明である。

溝 54・55 溝 54 は調査区中央で検出した遺構で、溝 51 に切られる。検出長は約 3.8 m、最大幅は 0.32 m を測る。主軸は南北方向であるが、途中鉤状に屈曲する。北方にある溝 57 との連続性は明らかではない。溝 55 はその東に位置する遺構で、同じく屈曲する形状を呈する。検出長は 2.7 m、最大幅は 0.3 m を測る。ピット 63 を切って成立する。埋土はともにオリーブ褐色微砂混じりシルトを主体とし、細かい土師器片を含む。遺構の性格は不明である。

ピット 5 区では計 12 基のピットを検出した。切りあい及び埋土から 3 時期が想定される。このうちピット 61・62・63 は、北西-南東方向に並ぶ柱列として復原できる。柱間は 2.5 m、埋土はいずれも黒褐色細砂混じりシルトを主体とし、炭化物や弥生土器片、焼土塊を含む。ピット

61 からは、弥生土器壺の破片がまとまって出土した。またピット 65 からは、鉢の口縁部が出土した。

(6) 出土遺物 (図 58)

今回の調査では弥生時代中期～後期の遺物が出土した。

1・2 は弥生土器鉢の口縁部である。1 は刻目をもつ貼付突帯 1 条の上位に波状文、下位には斜め方向に並行する列点文を施す。3 区の掘削中に出土した。2 は口縁端部が残存する土器片で、刻目突帯 2 条の間に波状文を施すとともに口縁端部にも刻目を入れる。5 区ピット 65 より出土した。突帯や波状文で加飾する鉢は、中期前半に出土事例がある。

3～5 は竪穴建物 101 から出土した。3 は甕の底部で、外面にタタキ調整を施す。底面にはドーナツ状の凹みをもつ。後期新段階の製品である。4 は器台の口縁部で、肥厚させた口縁端面に擬凹線を 2 条施す。後期の製品である。5 は張り出した胴部をもつ壺状の土器である。把手を欠くものの、複数出土した口縁破片の傾きに緩急があること、またプロポーション等から水差形土器である可能性がある。外面は摩滅するが僅かに縦方向のハケ調整を認める。内面は下半部が斜め方向のハケ、上半部には指頭圧痕を残す。弥生中期後半の製品か。

6 は広口短頸壺の体部とみられる土器で、外面には右下がりのタタキ後に縦方向のハケ目を施す。中期後半の製品である。3 区掘削中に出土した。

7 は長頸壺の頸部から胴部にかけての部位である。丸く張り出した胴部と内傾

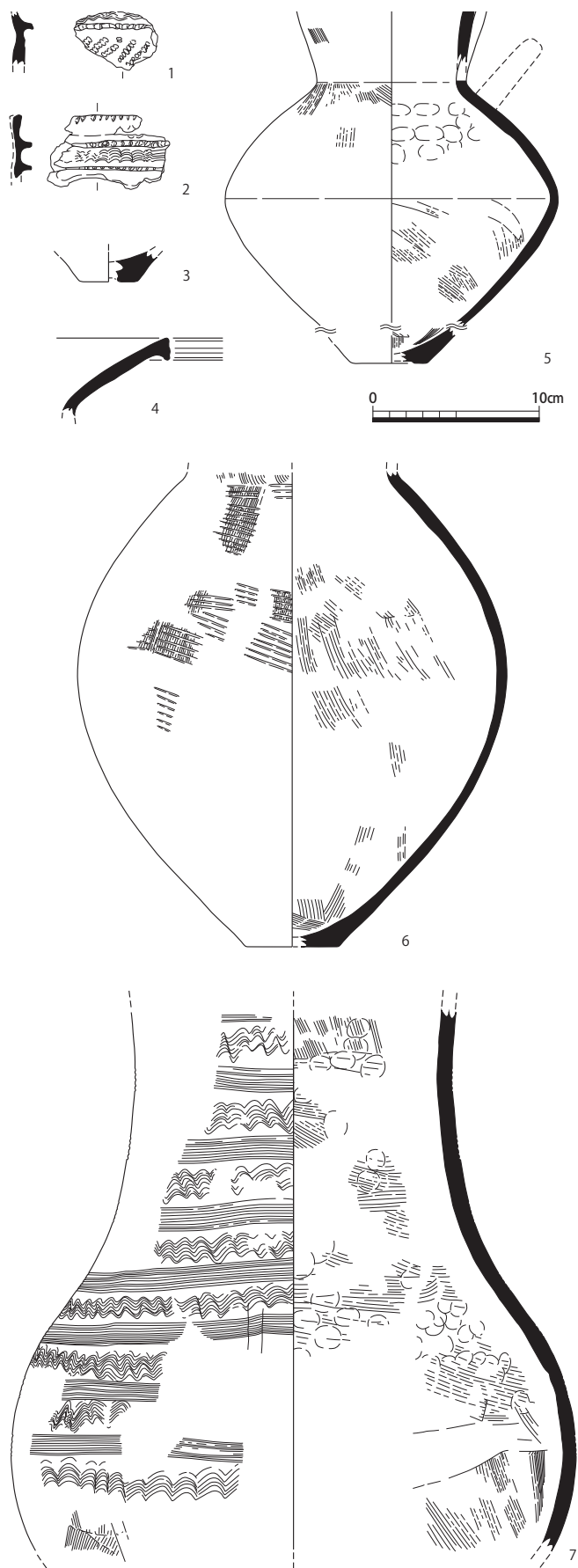


図 58 出土遺物実測図 (1 : 4)

しながら上へのびる頸部をもち、やがて外方へ開く口縁部へ続く様相をみせる。外面はハケ調整の後、直線櫛描文と波状文を交互に広く付す。施文には歪みがあり、均質性は低い。内面には多方向のハケ目と指頭圧痕が残る。器形と施文から中期初頭～前半の製品と推定される。5区ピット65より出土した。

4. まとめ（図59）

以上、下津林遺跡で実施した試掘調査結果について報告した。

今回の一連の調査では、面的調査を実施したことにより、溝や柱列、竪穴建物の存在とその広がりを確認できた。また遺構内からの遺物出土により、集落の存続時期が弥生時代中期初頭、中期後半、後期後半の3段階にまたがるのが濃厚となった。これまで散布地として理解されてきた下津林遺跡が、集落跡として認識される情報を得たと言えよう。京都市南部の弥生時代の集落動向を考察する上で、貴重な事例として報告したい。

（黒須亜希子）

註

- 1) 調査①：京都市文化観光局 1991年「V 下津林遺跡」『京都市内遺跡立会調査概報』平成3年度
- 2) 調査②：京都市文化市民局 2024年「調査一覧表」『京都市内遺跡詳細分布調査報告』令和5年度

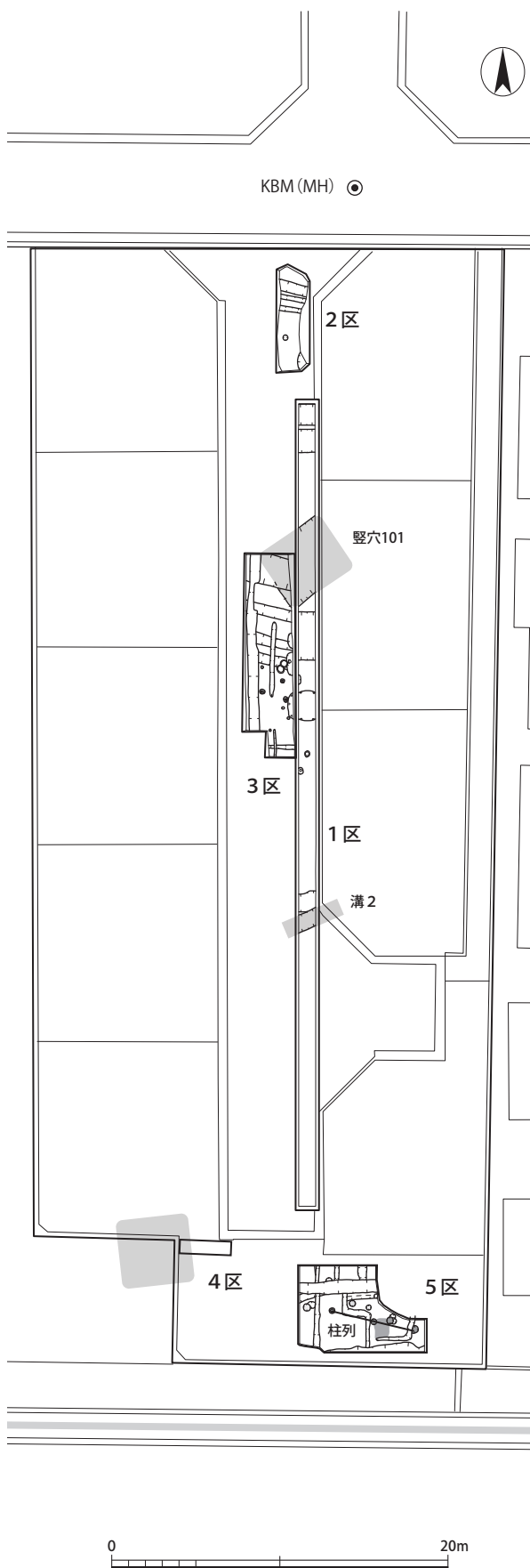


図59 遺構面接合図（1：40）

Ⅳ 試掘調査一覧表

令和6年 1～3月 【令和5年度】

平安宮

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
1	大蔵省跡	上京区上長者町通 千本西入五番町 156	3/26	GL-1.0～-1.4 mで暗褐色礫混じり粘質土～暗オリーブ褐色粘質土の時期不明包含層、-1.4～-2.02 mでにぶい褐色粘質土～黄褐色礫混じり粘質土の地山。顕著な遺構・遺物なし。	13 ㎡	23K542

平安京左京

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
2	一条二坊十一町跡	上京区東堀川通出 水下の四町目 192- 1、193、194、195	3/21	現地測量をおこなった。	0 ㎡	23H537
3	二条二坊八町跡、 二条城北遺跡	上京区堀川通丸太 町上る上堀川町 121 他	1/11	GL-2.04～-2.26 mで地山の砂礫層を確認。顕著な遺構・遺物は確認できず。	11 ㎡	23H328
4	二条二坊十一町跡	中京区堀川通竹屋 町下る八町目 540 他	1/18	GL-0.7 mで安土桃山整地層、-0.8 mで室町整地層、-1.1 mで平安～鎌倉整地層、-1.3 mで平安前期の整地層。 発掘調査を指導。	37 ㎡	23H445
5	三条三坊十二町跡	中京区堀川通姉小 路下る姉東堀川町 78-1 他	1/12	GL-0.75 mで黒褐色砂礫、-0.9 mで暗灰色砂礫、-1.15 mで褐灰色粘質土の室町整地層か、-1.3 mでにぶい黄褐色シルトの地山。地山上面で平安後期の落込み。遺構密度希薄。	11 ㎡	23H300
6	三条四坊九町跡	中京区押小路通柳 馬場東入橘町 640、 642	2/21	GL-0.65 m以下で平安前期～中世の遺構面を確認。 発掘調査を指導。	41 ㎡	23H422
7	四条三坊五町跡、 烏丸綾小路遺跡	中京区新町通四条 上る小結棚町 427、 429 ほか	2/19	GL-1.0 mで灰色泥土の中世後期包含層、-1.25 mで灰色泥土の中世包含層、-1.75 mで灰オリーブ色砂泥の平安後期包含層、-2.0 mで灰黄色粗砂の地山を確認。計画範囲大半が解体建物による攪乱。	22 ㎡	23H510
8	七条四坊十六町跡	下京区東高瀬川筋 上ノ口上る岩滝町 174 ほか 6 筆	3/18	GL-1.8 mで暗灰黄色砂礫の氾濫堆積。	10 ㎡	23H470

平安京右京

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
9	一条三坊十五町跡	右京区花園長北町 20-3	3/5	GL-0.3 mで黄褐色シルトの地山を確認。顕著な遺構遺物なし。	49 ㎡	23H520
10	三条二坊六・十一町跡、 御土居跡、西ノ京遺跡	右京区西ノ京南原 町 25	3/7	GL-0.25 mで御土居構築土、-1.3 mで西堀川小路及び西堀川を確認。 発掘調査を指導。	58 ㎡	23H441

11	七条一坊二・七町跡、御土居跡、堂ノ口町遺跡	下京区朱雀分木町 21-1 の一部ほか	1/19、2/22	GL-0.9 mで明黄褐色シルトの地山。地山上面で平安～鎌倉の西坊城小路側溝などの遺構を確認。 発掘調査を指導。	47 m ²	23H460
12	七条四坊二町跡	右京区西京極町ノ坪町 12-1 の一部、12-2	1/16	GL-1.4 mの灰色粘土以下湿地状堆積で、-1.7 mで灰黄色中粒砂、-2.2 mで青灰色シルト～細砂。顕著な遺構・遺物なし。	27 m ²	23H151
13	七条四坊八町跡	右京区西京極畔勝町 58	3/14	GL-1.3 mの灰黄色極細砂以下氾濫堆積。	19 m ²	23H499
14	九条四坊一町跡	南区吉祥院宮ノ東町 1～12、13	3/11	GL-1.57 mの褐灰色粗砂以下氾濫堆積。	15 m ²	23H466
15	九条四坊二町跡	南区吉祥院宮ノ東町 25	2/5	GL-0.22 mのにぶい黄橙色細砂～砂礫以下氾濫堆積層。	38 m ²	23H353

太秦地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
16	嵯峨院跡	右京区嵯峨観空寺明水町 37、61-1、61-2、61-7、62	2/29	GL-0.2 ～ -0.8 mでにぶい黄褐色礫混じりシルトの地山。地山上面で多数の柱穴、土坑を確認。 発掘調査を指導。	79 m ²	23S030
17	嵯峨遺跡	右京区嵯峨烏居本仏餉田町 17-1、17-2	2/13	GL-0.2 mで淡黄色粘質土～礫混じりの地山。顕著な遺構・遺物なし。	14 m ²	23S295
18	嵯峨遺跡	右京区嵯峨天龍寺瀬戸川町 3-2	1/17	GL-0.45 mで黒褐色泥砂、-0.6 mで黄褐色シルトの地山。室町の土坑・ピット等を確認。 設計変更により地中保存。本文 11 ページ。	33 m ²	23S450
19	史跡及び名勝嵐山	右京区嵯峨天龍寺芒ノ馬場町 7-1、3	3/28	北半で GL-0.5 m、南半で GL-1.1 mで近世以前の遺構面を確認。	20 m ²	5N037
20	太秦馬塚町遺跡	右京区太秦馬塚町 23-1、23-3、23-4、23-5、23-6、23-7	2/20	GL-0.5 mで明黄褐色シルトの地山を確認。遺構密度希薄。	54 m ²	23S494
21	和泉式部町遺跡	右京区太秦森ヶ西町 20-3	1/25	GL-0.2 mでにぶい黄褐色シルトの弥生包含層。 発掘調査指導。	34 m ²	23S341
22	御所ノ内町遺跡、多藪町遺跡	右京区太秦堀ヶ内町 11-6	2/14	GL-0.4 mでにぶい黄褐色小礫混じり粘質土の時期不明包含層、-0.5 mで暗褐色粘質土の地山。顕著な遺構・遺物なし。	27 m ²	23S488

洛北地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
23	岩倉忠在地遺跡	左京区岩倉忠在地町 823	2/15	GL-0.2 mで暗褐色小礫混粘質土の時期不明包含層、-0.4 mで黄褐色粗砂混粘質土の地山。顕著な遺構・遺物なし。	40 m ²	23S492
24	植物園北遺跡	左京区下鴨北芝町 13、25	1/10	GL-0.25 mでにぶい黄橙色シルトの地山。弥生の遺構・遺物を確認。 発掘調査を指導。	26 m ²	23S459
25	室町殿跡、上京遺跡	上京区室町通上立売下る裏築地町 69、69-1、71・同区上立売通室町東上立売東町 30	2/26	GL-0.7 ～ -0.9 mで江戸前半、-0.9 ～ -1.2 mで室町後半、-1.1 ～ -1.4 mで室町中頃、-1.3 ～ -1.7 mで室町前半の各遺構面を確認。 発掘調査を指導。	40 m ²	23S425

北白川地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
26	北白川廃寺	左京区北白川堂ノ前町 25-2	1/9 ・15	GL-0.95 mで黄褐色細砂～粗砂、-1.1 mで黒褐色泥砂、-1.6 mで浅黄色粗砂。奈良～平安のピット・土坑を確認。 発掘調査を指導。	21 m ²	23S170

洛東地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
27	法性寺跡	東山区福稲上高松町 11	3/13	GL-0.5 mで明黄褐色砂泥の整地土、-0.6 mの地山直上で古墳の竪穴建物。 発掘調査を指導。	20 m ²	23S411
28	中臣遺跡	山科区栗栖野狐塚 1-2、2、2-1、2-2、3-2	1/29 ・30	GL-0.25 ～ -0.3 mで黄色～にぶい黄褐色砂礫などの氾濫堆積。遺構・遺物ともに希薄。	228 m ²	23N355

長岡京地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
29	左京三条四坊九町跡	伏見区久我西出町 7-4・5・6・7	2/6 ～ 9	GL-0.75 mでにぶい黄橙色シルトの地山。長岡京期の井戸・柱穴・溝を確認。 北側は発掘調査を指導、南側は設計変更により遺跡を地中保存。	248 m ²	23NG434
30	左京四条三坊九・十町跡	伏見区羽東師菱川町 486-1、486-2	3/1	GL-1.3 mでオリーブ褐色細砂混じり粘土質シルトの地山。顕著な遺構・遺物なし。	9 m ²	23NG484
31	左京五条三坊八町跡	伏見区羽東師菱川町 245	1/26	GL-0.15 mの粗砂～砂礫以下氾濫堆積層。	23 m ²	23NG469

南桂川地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
32	史跡・特別名勝 西芳寺庭園	西京区松尾神ヶ谷町 56	1/22 ・23	GL-0.06 mで旧排水路を確認。 本文 36 ページ。	2 m ²	4N080

令和6年 4～12月 【令和6年度】

平安宮

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
33	大宿直跡・内教坊跡、聚楽第跡	上京区日暮通中立売下る須浜町244、245、245-1、245-2、246-2・中立売通裏門東入多門町445-1	4/23・24	7区周辺で、GL-0.6 mで整地層、-0.7 mでにぶい黄褐色シルトの地山を確認。攪乱などで削平を受けていたが、それらの間で溝やピットなどを確認。計画地南端(7区周辺)については、 発掘調査を指導 。	94 m ²	24K037
34	大蔵省跡	上京区上長者町通千本西入五番町180-1	5/1	GL-1.0～-1.5 mで褐色砂礫の地山。顕著な遺構・遺物なし。	18 m ²	23K541
35	中和院跡、聚楽遺跡	上京区下立売通千本西入稲葉町458	5/13	GL-1.21 mで黒色粘性中砂の時期不明包含層、-1.35 mで黒色中砂(礫混)の土壌化層、-1.45 mでにぶい黄褐色砂泥の地山。近世土取穴により遺構面は削平。	6 m ²	24K015
36	宴松原跡	上京区下立売通七本松東入長門町43ほか4筆	4/11	GL-0.75 mの褐色微砂～シルト以下地山で、-0.85 mでオリーブ褐色砂礫～礫混じりシルト、-1.05 mで暗褐色砂礫～礫混じりシルトの地山、-1.2 mでオリーブ褐色粘土質シルト。顕著な遺構・遺物なし。	20 m ²	23K575
37	豊楽院跡、鳳瑞遺跡	中京区聚楽廻西町183-12	8/27	GL-1.5 mで青黒色シルト、-1.6 mで暗青灰色微砂～シルト、-1.95～-2.11 mで暗灰黄色砂礫の地山。顕著な遺構・遺物なし。	7 m ²	24K207
38	御井跡	中京区西ノ京車坂町15-10ほか	4/12	GL-0.7 mで暗褐色粗砂～細砂、-0.75 mで暗褐色砂礫～粗砂以下地山で、-0.9 mで褐色シルト。顕著な遺構・遺物なし。	20 m ²	23K415
39	兵部省跡	中京区西ノ京内畑町31	8/28	GL-1.05～-1.2 mでにぶい黄褐色砂泥～にぶい黄褐色シルトの地山。顕著な遺構・遺物なし。	33 m ²	24K269
40	式部省跡	中京区西ノ京式部町21	11/25	GL-0.35 mで褐灰色礫混じり砂泥、-0.7 mで黄褐色砂礫～明黄褐色シルトの地山。顕著な遺構・遺物なし。	16 m ²	24K284

平安京左京

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
41	一条二坊十一町跡	上京区東堀川通出水下る四町目192-1、193、194、195	4/2	GL-0.6 mで黄褐色シルトの地山。地山上面で平安ピット。攪乱が著しく、遺構・遺物の遺存状態は不良。	37 m ²	23H537
42	一条二坊十二町跡	上京区下立売通油小路西入東橋詰町172-1ほか	7/3・4	GL-0.85 mで暗褐色粘性中砂の近世整地層、-1.15 mでにぶい黄褐色細砂～暗褐色粘性細砂の中世包含層、-1.3 mで黒褐色泥砂の中世整地層、-1.55 mで褐色シルトの地山。各層で複数の遺構を確認。 発掘調査を指導 。	71 m ²	24H036
43	一条三坊十三町・二条四坊一町跡、公家町遺跡、烏丸丸太町遺跡	上京区京都御苑3	7/5、8/29	GL-0.12 mでにぶい黄褐色中砂以下近世整地層で、-0.15 mで灰褐色細砂、-0.22 mで灰黄褐色細砂、-0.3 mで焼土を含む灰黄褐色中砂、-0.41 mでにぶい黄褐色中砂、-0.6 mで黄灰色細砂。 設計変更により、地中保存 。	12 m ²	24H182

44	二条三坊十三町跡、 烏丸丸太町遺跡	中京区蒔絵屋町 282	4/5	GL-1.4 mで近世前半包含層、-1.7 mで浅黄橙色シルトの地山。地山上面で平安～室町の遺構を多数確認。 発掘調査を指導。	27 m ²	23H555
45	三条四坊二町跡	中京区東洞院通押 小路下る船屋町 412-1	5/15・ 16	GL-0.9 mで褐灰色粘性中砂～細砂の近世前半整地層、-1.25 mで褐灰色粘性中砂の室町後半整地層、-1.8 mで灰オリーブ色砂泥の中世整地層、-1.97 mで灰オリーブ色砂泥の時期不明整地層、-2.07 mで暗オリーブ色シルトの地山。各層で遺構を確認。 発掘調査を指導。	55 m ²	23H563
46	四条一坊五町跡	中京区壬生坊城町 26-4、27-6	7/11	GL-0.9 mで暗灰黄色細砂混じりシルト、-1.0 mで黄灰色粗砂混じりシルトの中世包含層、-1.2 mで灰色微砂混じりシルトの平安包含層、-1.3 mで暗オリーブ褐色砂礫の地山。坊城小路の内溝を確認。 発掘調査を指導。	17 m ²	24H196
47	四条三坊十町跡、 烏丸御池遺跡	中京区烏丸六角下 る七観音町 633	4/26	GL-1.6 mで黒褐色中砂の江戸包含層、-1.84 mで黒褐色泥砂の室町土坑、-2.3 mでにぶい黄褐色泥砂の時期不明整地層、-2.5 mで暗黄灰色砂礫の地山。 発掘調査を指導。	22 m ²	24H031
48	五条一坊十二・十三 町跡	中京区壬生相合町 1	4/1	GL-2.0 m以上まで解体攪乱。	5 m ²	23H627
49	五条四坊七町跡、 烏丸綾小路遺跡	下京区仏光寺通高 倉東入西前町 383、 384、385	10/17	GL-0.7 mで室町後期包含層、-1.0 mで室町中期包含層、-1.3 mでウグイス整地層、-1.5 mでオリーブ黄色シルト質細砂の地山。遺構面が良好に残る。 発掘調査を指導。	35 m ²	24H246
50	六条三坊十一町跡	下京区大黒町 196、 196-12、196-14、 196-17	10/9	GL-1.1 mで褐色泥砂の近世包含層、-1.45 mで暗灰黄色微砂の平安末期～鎌倉包含層、-1.6 mで灰色砂礫の氾濫堆積、-1.9 m～-2.35 mでオリーブ褐色砂礫。顕著な遺構・遺物なし。	7 m ²	24H167
51	八条一坊十六町跡	下京区御器屋 町 67-1、70-1、 70-3、70-6	10/8	GL-0.7 mで灰オリーブ色泥砂の時期不明整地層、-0.85 mでシルトブロックを含む暗オリーブ色泥砂の河川堆積、-1.05 mで灰色粗砂。攪乱著しく、顕著な遺構・遺物なし。	20 m ²	24H303
52	八条二坊二町跡	下京区大宮通木津 屋橋下る中之町 2	9/9	GL-1.5 mまで解体攪乱。	8 m ²	24H258
53	八条二坊五町跡	南区戒光寺町 185 ほか 8 筆	7/1	GL-0.35 mで灰褐色中砂の時期不明整地層、-0.75 mで黒褐色細砂の時期不明整地層、-0.9 mで暗灰黄色～灰色砂泥の地山。攪乱著しく、顕著な遺構・遺物なし。	23 m ²	24H014
54	八条四坊六町跡	下京区下之町 21-1 ほか 52 筆	8/5	GL-1.1 mの褐色、橙色粗砂～砂礫以下、鴨川氾濫堆積。顕著な遺構・遺物なし。	122 m ²	24H227
55	九条一坊八町跡	南区壬生通八条下 る東寺町 516-2、 517-1、517-2、518	9/11	GL-0.6 mで中世整地層、-0.7～-0.8 mで灰色粗砂の自然堆積層。整地層上面で小ピット数基確認するものの、遺構密度希薄。	20 m ²	24H268
56	九条一坊九町跡、 教王護国寺境内 (東寺旧境内)	南区八条通大宮西 入八条町 437-1	8/20	GL-0.45 mで灰黄色粘質土の時期不明整地層、-0.65～-1.55 mで淡黄色細砂～暗灰黄色砂礫の氾濫堆積。顕著な遺構・遺物なし。	17 m ²	24H161
57	九条四坊四町跡、 烏丸町遺跡	南区東九条上御霊 町 26-1 ほか 4 筆	11/12	GL-0.8 m以下、灰色砂質土の氾濫堆積。遺構密度希薄。	30 m ²	24H248

平安京右京

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
58	一条四坊十三町跡	右京区花園伊町 38-6、41 の一部、 43	6/6	GL-0.6 mで黒褐色泥土の中世以降整地層、-0.8 mで黒色泥土の平安整地層、-1.4 mで灰色砂礫の旧流路を確認。 発掘調査を指導。	33 m ²	24H137
59	三条三坊八町跡、 西ノ京遺跡	中京区西ノ京徳大寺町 1	6/3	GL-0.6 mで中世後期包含層（15 世紀）、-0.8 mで旧流路及び黄褐色粗砂混じり粘土質シルトの地山。地山上面で中近世耕作溝。流路により遺構面削平。顕著な遺構・遺物なし。	30 m ²	24H020
60	三条四坊三町跡	右京区山ノ内宮脇町 12	4/17	GL-1.3 mで黒色微砂混じり粘土質シルトの近世耕作土、-1.4 mで灰オリーブ色微砂混じりシルトの地山。地山上面で水田に伴う溝、段差、杭穴。顕著な遺構・遺物なし。	27 m ²	23H556
61	三条四坊六町跡	右京区山ノ内宮脇町 1-5、-6、-7、 13-2、24、25	12/17	GL-1.26 mで浅黄色粘質土～シルトの地山。顕著な遺構・遺物なし。	22 m ²	24H282
62	三条四坊六町跡	右京区山ノ内大町 1-1	12/18 ・ 19	GL-1.29 ～ -1.49 mで灰色粘土及び砂礫の地山。顕著な遺構・遺物なし。	45 m ²	24H281
63	四条三坊十・十一・ 十四・十五町跡	右京区西院春栄町 25 の一部、25-33 の一部・山ノ内赤 山町 1-1 の一部	7/8・9	GL-1.45 mでオリーブ色粘質シルトの地山。地山上面で時期不明ビット・溝。 設計変更により、遺構は地中保存。	58 m ²	24H081
64	五条三坊八町跡、 西院城跡（小泉城）	右京区西院巽町 22	10/24	GL-0.75 mで黒褐色シルトの中世後半～近世初頭遺構面、-1.0 mで明黄褐色シルトの地山。宇多小路西側溝、多数の柱穴、土坑を確認。 発掘調査を指導。	30 m ²	24H256
65	五条四坊二町跡、 西京極遺跡	右京区西院日照町 52-1、53-2	6/5	GL-1.05 mのにぶい黄褐色細砂混じりシルトの土壌化層上面で溝や土坑などを確認。溝は木辻大路西側溝か。 本文4ページ。	34 m ²	23H464
66	五条四条五町跡、 西京極遺跡	右京区西院月双町 24-1、24-2	11/6	GL-1.2 ～ -1.5 mで灰オリーブ色粘質シルトの整地土、-1.3 ～ -1.9 mで明黄褐色粘質土や灰色シルトの地山。整地土上面で近世耕作溝を確認。顕著な遺構・遺物なし。	44 m ²	24H320
67	六条二坊十町跡	右京区西院南高田 町 17、18-1	10/1	GL-0.4 mで暗緑灰色泥砂の旧耕土、-0.45 mで褐色砂泥の地山。地山上面で中世以前の土坑を確認。 発掘調査指導を指導。	56 m ²	24H316
68	六条二坊十町跡	右京区西院南高田 町 17-2、18-2、 18-3	10/2 ・ 7	GL-0.35 mで黄灰色泥砂の近世旧耕土、-0.45 mで灰黄褐色泥砂の中世耕作土、-0.55 mでにぶい黄褐色砂泥の地山。地山上面で平安遺構を確認。 発掘調査を指導。	63 m ²	24H317
69	六条三坊六町跡	右京区西院西溝崎 町 22-1、22-4、 22-5	11/15	GL-0.6 ～ -0.8 mで灰黄褐色微砂混じりシルトの地山。地山上面で馬代小路東側溝、時期不明のビットを4基確認。 本文8ページ。	39 m ²	24H421
70	六条四坊二町跡、 西京極遺跡	右京区西院清水町 162	9/5	GL-0.55 mで黄褐色シルトの地山。竪穴建物及び落込みを確認。設計変更により、地中保存。	10 m ²	24H255
71	六条四坊六町跡、 西京極遺跡	右京区西京極東大 丸町 23-1、23-2、 25	11/5	GL-1.2 mで浅黄色小礫混じり粘質土の時期不明包含層、-1.6 ～ -1.65 mで黄橙色～褐色灰色砂礫の氾濫堆積。顕著な遺構・遺物なし。	70 m ²	24H382

72	七条三坊七町跡	右京区西京極南庄境町 53-54	12/12	GL-0.5 mで黒褐色細砂混じりシルト、-0.7 mでオリーブ黒色粗砂、-1.0 mでオリーブ黒色砂礫。顕著な遺構・遺物なし。	34 m ²	24H419
73	七条三坊十六町跡	右京区西京極豆田町 13、14	7/29・30	GL-0.1 mで黒褐色泥砂の古墳包含層、-0.3 ～ -0.5 mで暗褐色微砂の無遺物層、-0.5 ～ -0.8 mで礫多量含む黄灰色中砂～粗砂の水成堆積。顕著な遺構・遺物なし。	41 m ²	24H121
74	八条二坊十二町跡	下京区七条御所ノ内町 84-1、84-3、84-4	4/18	GL-0.8 mで暗緑灰色泥土の時期不明包含層、-1.1 mで緑灰色泥土、-1.4 mで灰色細砂混じり泥土の無遺物層、-1.8 mで淡黄色砂礫の地山を確認。顕著な遺構・遺物なし。	52 m ²	23H584
75	八条三坊五町跡	南区吉祥院西ノ庄西浦町 74、75	4/8	GL-1.21 m以下、氾濫堆積。顕著な遺構・遺物なし。	39 m ²	23H629
76	八条四坊四町跡	南区吉祥院向田東町 9	8/26	GL-1.84 mで黄橙色微砂の氾濫堆積、-1.99 mでにぶい黄褐色粗砂、-2.18 mで明黄褐色粗砂。顕著な遺構・遺物なし。	31 m ²	24H193
77	九条一坊十二町跡、史跡西寺跡、唐橋遺跡	南区唐橋西寺町	10/18	GL-0.45 mで時期不明整地層。	11 m ²	6N033
78	九条四坊七町跡	南区吉祥院中河原里北町 1、2	6/20	GL-0.4 mで灰黄色砂礫、以下氾濫堆積を-2.1 mまで確認。顕著な遺構・遺物なし。	12 m ²	24H144

太秦地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
79	龍安寺御陵ノ下町遺跡	右京区龍安寺御陵ノ下町 1-1、2-3、2-4、2-6	10/15・16、11/11	GL-0.25 mで暗灰黄色小礫混じり粘質土の中世整地層、-0.5 mで明黄褐色粘質土の地山。中世、中世以前のピット・土坑を確認。 発掘調査を指導。	100 m ²	24S232
80	嵯峨院跡	右京区嵯峨観空寺明水町 37、61-1、61-2、61-7、62	4/30	GL-0.5 mでにぶい黄褐色シルトの地山。樹木痕により遺構面削平。顕著な遺構・遺物なし。	264 m ²	23S030
81	大覚寺古墳群	右京区嵯峨大覚寺門前登り町 40-3 ほか	11/13・14	GL-0.25 mで黒褐色粘質土～褐灰色粗砂、-0.45 mで黄褐色砂礫の地山。黒褐色粘質土上面で室町遺構、地山上面で時期不明の溝。 取扱い協議中。	76 m ²	24S307
82	仁和寺院家跡、円乗寺跡	右京区花園円成寺町 10・花園天授ヶ岡町 41-1	12/4	GL-0.6 ～ -1.8 mでにぶい黄橙色シルトや灰白色シルトの地山。攪乱が顕著で、遺構面削平。	29 m ²	24S290
83	仁和寺院家跡	右京区花園岡ノ本町 4-13	6/21・24	GL-0.3 mで赤褐色砂礫の地山。攪乱により遺構面削平。	9 m ²	21S453
84	嵯峨遺跡	右京区天龍寺瀬戸川町 3-2	5/8～10	GL-0.6 mで黄褐色シルトの地山。室町の土坑・ピットなどを確認。 本文 11 ページ。	45 m ²	23S450
85	草木町遺跡	右京区常盤草木町 18、19、20	11/22	GL-0.25 mで褐灰色粘質土の時期不明包含層、-0.4 mで明黄褐色粘質土から灰黄褐色砂礫の地山。地山上面で土坑・溝を確認。 発掘調査を指導。	44 m ²	24S219
86	常盤東ノ町古墳群、村ノ内遺跡	右京区常盤一ノ井町 6	11/19・20	GL-0.2 mでにぶい黄色シルトの遺構面。土坑・溝・ピットなどを確認。 発掘調査を指導。	105 m ²	24S141
87	常盤仲之町遺跡	右京区太秦蜂岡町 13 ほか	12/9・10	GL-0.63 mで褐色シルトの地山。平安時代後期～中世の遺構を検出。 発掘調査を指導。	81 m ²	24S315

88	常盤仲之町遺跡、 広隆寺旧境内	右京区太秦東峰岡 町 10	9/3・4	GL-0.7 mで暗褐色シルトの中世遺物包 含層、-0.9 mで黄褐色シルトの地山を確 認。各面で遺構が成立。 発掘調査を指導 。	143 m ²	23S586
89	常盤仲之町遺跡、 広隆寺旧境内	右京区太秦東峰岡 町 10	9/20・ 24・25	GL-0.4 mでにぶい黄褐色微砂混じりシ ルトの中世整地層、-0.7 mで褐色微砂混 じりシルトの地山。各層上面で遺構が成 立。 取扱い協議中 。	155 m ²	24S187
90	西野町遺跡	右京区嵯峨野千代ノ 道町 16-1 ほか 7 筆	7/22 ～ 24	GL-0.7 mで灰黄褐色シルトの地山を確 認。顕著な遺構・遺物なし。	98 m ²	24S107
91	嵯峨野高田町遺跡	右京区嵯峨野南 浦町 9、10、57、 66、67、68	7/12	GL-0.3 mで暗灰黄色細砂混じりシルト の中世包含層、-0.4 mで灰黄褐色細砂混 じりシルトの平安包含層、-0.5 mで褐色 砂質シルトの地山。 本文 14 ページ 。	26 m ²	22S603

洛北地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
92	本山遺跡	北区上賀茂本山 2-1、2-70・左京 区静海市原町 789	9/2	GL-0.2 mでにぶい黄橙色シルト。顕著 な遺構・遺物なし。	11 m ²	24S213
93	木野墓窯跡	左京区岩倉幡枝町 1067-4 他 地内	10/25、 11/1 ・ 8	GL-0.1 mで須恵器や瓦を含む灰原、-0.4 mで灰黄褐色泥土、-0.8 mで浅黄色粘質 土の地山。 遺跡の地中保存。本文 23 ページ 。	174 m ²	24S357
94	植物園北遺跡	北区上賀茂岡本町 14、15	5/27 ・ 28	GL-1.0 mで黒褐色砂泥、-1.15 mで暗褐 色砂泥の中世遺物包含層、-1.35 ～ -1.80 mで褐色粘質土、黄灰色粘質土、黄色粘 質土の地山。顕著な遺構・遺物なし。	44 m ²	24S001
95	植物園北遺跡	北区上賀茂南大路 町 85 他	7/2	GL-0.3 ～ -0.5 mで暗灰黄色粗砂混じり シルトの地山。平安後期～室町の遺構面 を確認。計画中止。 本文 18 ページ 。	61 m ²	24S174
96	植物園北遺跡	左京区松ヶ崎呼返 町 47-2、松ヶ崎芝 本町 30-2	12/13	GL-0.4 mで黒褐色細砂混じりシルト、 -0.55 mで暗褐色細砂混じりシルトの地 山。顕著な遺構・遺物なし。	67 m ²	24S384
97	御土居跡	北区紫竹北大門町 37-2	10/31	GL-0.23 m以下、解体攪乱。	10 m ²	24S197
98	相国寺旧境内、 上御霊遺跡	上京区今出川通烏 丸東入相国寺門前 町 703 の一部	12/16	GL-0.6 mで黒褐色礫混じり粘質土の時 期不明包含層、-1.0 mで黒褐色礫混じり 粘質土以下無遺物層で、-1.4 mで灰黄褐 色砂礫。顕著な遺構・遺物なし。	37 m ²	24S363

北白川地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
99	一乗寺跡	左京区一乗寺燈籠 本町 27	7/18	GL-0.7 mで黒褐色中砂混じり粘質土、 -0.8 mで黒褐色粗砂の土壌化層、-0.9 m の黄灰色粗砂以下地山で、-1.8 mでに ぶい黄褐色シルトと灰黄褐色シルトの互 層、-1.9 mで黒色粘土、-2.1 ～ -2.2 m で褐灰色粗砂。顕著な遺構・遺物なし。	26 m ²	24S190
100	公家町遺跡、 寺町旧域	上京区寺町通今出 川下る三丁目染殿 町 668-2	10/28	GL-0.45 mで暗褐色粘質土の近世整地 層、-0.7 mで明黄褐色粗砂、-0.9 mでに ぶい黄橙色砂礫以下氾濫堆積。 発掘調査 を指導 。	48 m ²	24S169

101	白河南殿跡	左京区聖護院蓮華蔵町 8-36	4/22	GL-1.23 m でにぶい黄褐色砂礫の近世氾濫堆積、-1.39 m で黄灰色粘質土の室町包含層、-1.97 m で灰色砂礫の地山。顕著な遺構・遺物なし。	16 m ²	24R029
-----	-------	-----------------	------	---	-------------------	--------

洛東地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
102	寺町旧域	中京区裏寺町通蛸薬師下る裏寺町 601-1	6/26	GL-0.24 m で江戸整地層、-0.35 m で暗灰黄色粗砂混じりシルトの焼土層、-0.41 ～ -0.89 m で黄灰色砂礫の氾濫堆積。寺町旧域期の遺構面が良好に残存。計画中止。	2 m ²	24S056
103	建仁寺旧境内	東山区大和大路通四条下る 4 丁目小松町 584	5/21	GL-0.1 m で小鐘楼の基壇盛土を確認。	1 m ²	24S095
104	六波羅政庁跡	東山区大和大路通五条上る山崎町 341-2、345、345-1、346-1、-2、-3	9/12	GL-0.7 ～ -1.0 m で室町後期の遺構面、以下平安時代末期まで複数の遺構面を確認。 発掘調査を指導。	29 m ²	24S231
105	六波羅政庁跡	東山区本町通五条下る本町三丁目 96、96-2、98	4/16	GL-1.0 m で褐灰色中砂～砂礫の近代氾濫堆積、-1.5 ～ -2.0 m で黄灰色砂礫の時期不明氾濫堆積。顕著な遺構・遺物なし。	12 m ²	24S024
106	法性寺跡	東山区福稲上高松町 11	7/16	GL-0.5 m で灰黄褐色シルトの包含層、-0.6 m でにぶい黄橙色シルトの地山。 発掘調査を指導。	76 m ²	23S411
107	法性寺跡	伏見区深草南明町 21 の一部、21-1 の一部、21-3、21-4、21-5・深草開土町 146-6、147-6、147-4、150 の一部	12/20	GL-0.6 ～ -0.9 m で灰白色粗砂～粘土の地山。顕著な遺構・遺物なし。	21 m ²	24S429

伏見・醍醐地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
108	伏見城跡	伏見区桃山福島太夫西町 1-1	8/1	GL-0.33 m で黄褐色砂質土～泥砂以下伏見城期造成土で、-0.47 m で黄褐色砂質土、-0.65 m でにぶい黄褐色砂質土、-1.2 m でにぶい黄褐色砂質土、-1.4 m で暗灰黄色砂礫の地山。攪乱により遺構残存状況不良。	27 m ²	24F123
109	伏見城跡	京都市伏見区桃山福島太夫北町 52	11/26 ～ 29	GL-0.2 m で赤褐色中砂～粗砂などの伏見城期造成土。 発掘調査を指導。	126 m ²	24F410
110	伏見城跡	伏見区桃山町三河 59-4	5/22	GL-0.2 m でにぶい黄褐色砂質土の伏見城期整地層、-0.35 m でにぶい黄褐色砂質土の造成土、-1.8 m 以下にぶい黄褐色砂礫の地山か。	29 m ²	24F085
111	伏見城跡	伏見区新町六丁目 990 ほか 8 筆	10/10	GL-1.27 m で褐色粘質土の整地土、-1.6 m で暗灰黄色粗砂の地山。攪乱により残存状況不良。	35 m ²	24F238
112	伏見城跡	伏見区桃山町根来 18	6/17 ～ 19	GL-2.36 m まで氾濫堆積。	27 m ²	24F019

鳥羽地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
113	鳥羽離宮跡	伏見区竹田西樋ノ井町 10-2	10/23・30	GL-0.82 mの暗青灰色微砂以下湿地状堆積で、-0.88 mで暗灰色シルト、-1.28 mで灰黄褐色シルト、-1.4 ～ -1.71 mで青黒色シルト。顕著な遺構・遺物なし。	13 ㎡	24T326
114	鳥羽離宮跡、鳥羽遺跡	伏見区竹田真幡木町 176、177、178	9/18・30、10/1	GL-0.5 mで褐色泥砂、-0.7 mで灰黄褐色細砂、-0.8 mで灰色シルト～微砂の中世包含層、-1.4 mで灰色シルト。灰色シルトから鳥羽離宮期の遺物が出土。 試掘調査の延長を指導。本文 30 ページ。	45 ㎡	24T235
115	史跡鳥羽殿跡、鳥羽離宮跡、鳥羽遺跡	伏見区中島御所ノ内町	10/24	顕著な遺構、遺物なし。	4 ㎡	6N032
116	鳥羽離宮跡	伏見区中島河原田町 13-3、14、15、16、17、18、19-2	10/21	GL-3.22 ～ -3.93 mで灰色シルトを確認。顕著な遺構・遺物なし。	27 ㎡	24T234

長岡京地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
117	左京北辺四坊四町跡	南区久世築山町 250 の一部	12/23・24	GL-1.8 m以下、湿地状堆積。顕著な遺構・遺物なし。	44 ㎡	24NG332
118	左京三条三坊九・十六町跡	伏見区久我西出町 3-7、146、175、176、4-7 の一部、8、9	8/13～15	GL-0.35 mで黄灰色系シルトの遺構面を確認。古墳初頭の流路を確認したが、長岡京期の遺構は確認できず。	255 ㎡	24NG147
119	左京六条四坊十町跡	伏見区羽束師古川町 151	12/2・3	GL-0.25 mでにぶい黄橙色シルト、-1.23 mで褐灰色粘質シルト、GL-1.39 mで細砂混じり褐灰色粘質シルトや細砂の氾濫堆積。	40 ㎡	24NG138
120	左京七条三坊十二町跡、水垂遺跡	伏見区淀樋爪町 451-1 の一部	7/25	GL-0.75 ～ -0.85 mで灰黄色シルト、-1.21 ～ -1.37 mで青灰色シルトの湿地状堆積。	11 ㎡	24NG208

南桂川地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
121	史跡及び名勝嵐山	西京区嵐山西一川町 5-1、5-2、18、19	12/17	GL-0.7 ～ -0.9 mで河川堆積を確認。顕著な遺構・遺物なし。	10 ㎡	6N054
122	福西古墳群	西京区大枝東長町 1-13、1-455、1-721	6/13	GL-0.4 mで黄灰色粘質土の旧耕作土、-0.55 ～ -1.05 mで黄橙色粘質土や黄色礫混じり粘質土の地山。	23 ㎡	24S139
123	下津林遺跡	西京区下津林佃 65、66、67	6/25、9/12・13	GL-0.15 mでにぶい黄褐色細砂混じり粘土質シルトの無遺物層、-0.4 ～ -0.8 mでにぶい黄褐色細砂混じり粘土質シルトの地山。無遺物層上面で、弥生中～後期の溝、竪穴建物、ピットを検出。 設計変更により、地中保存。本文 40 ページ。	58 ㎡	24S128
124	上久世遺跡	南区久世上久世町 89	6/10・11	GL-0.6 mでオリーブ褐色砂質土の基盤層、-0.95 mで暗褐色細砂～細砂混じりシルトの湿地状堆積、-1.15 ～ -1.7 mで暗オリーブ褐色細砂～シルト。基盤層上面で中世・近世の遺構を確認。 発掘調査を指導。	84 ㎡	24S002